
君、竜の咆哮を聞け。

井口亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君、竜の咆哮を聞け。

【Nコード】

N1941BA

【作者名】

井口亮

【あらすじ】

靈歴一八六三年夏、龍元のダーザルゲツガ島空襲に端を発した第二次精霊戦争末期、龍元は北領をアルメリア共郷国に奪われ敗戦を迎えようとしていた。だが、一八六五年の冬、療養除隊していたダーザルゲツガ島空襲、ダダガルザ諸島激戦のエース『銀翼』の竜霊『銀嶺鱗・由露葉』とその竜霊剣護『浪代辰貴』が志願し、北領守護隊に配備されたことから、その敗戦のシナリオは大きく転換することとなる。第二次精霊戦争末期、北領の空を駆ける練装飛竜『銀戒』と『竜誇飛竜部隊』が辿る、敗戦の軌跡。

序幕 『東宮大空襲』

鈍の空から振る冷たさが、雪だと知るのに幾ばくかの時を必要とした。

灰色の緞帳に覆われた空は、はらはらと雪を舞い散らせる。

由露葉はしばらく惚けたように空を見上げ続けていた。

まさかよもや雪を再び見られるとは思わなかったからだ。

「……寒いな」

隣で同じように空を見上げる辰貴が白い息を吐きながら呟いた。

空を映す瞳は濁りきった光を称えている。

目を水平に落とせば、そこには街の無惨な残骸が横たわっていた。幼子が親を求める声、子が親を捜す声、そして、探すべき者の姿を見て泣き崩れる声が遠く聞こえる。

惨状といえば、惨状だった。

生気を失い、寒空の中、道の傍らに蹲る者、負傷してなお歩き力尽きて倒れる者、そして、僅かな食料を奪われて殺される者。

栈敷の下で物乞いのように風雨を凌ぐとする者、倒壊した家屋に押しつぶされた者、焼けこげた四肢のみをこの世の痕跡とした者。焦げついた臭いにほのかに香る死臭も、時が過ぎればあたりを支配するのだろう。

由露葉は恐ろしさを覚え、辰貴の袖を掴む。

二人は瓦礫を踏み越え、昨夜の空襲警報が響く前までの寢床だった場所に赴く。

東宮大空爆が後の世に東宮一帯を焼け野原にした史実に残る飛竜部隊を用いた大空襲であり、『東宮に破壊を免れた建造物は大龍府のみである』と記述される。

この記述に偽りはなく、二人が幾ばくかの時を過ごした家屋も跡形もなく焼けていた。

黒く焦げ、しぼんだ木の支柱が灰材の中にいくつか傾き、立ち並

ぶだけだった。

「どう、しましうか……」

由露葉が途方に暮れて尋ねる。

雪がちらほらと積もってきている。

外套の襟を立て、由露葉を抱えながら辰貴はこれからの身の振り方を考えねばならなかった。

龍元の冬は寒い。

雪の降る寒さの中、寒風に身をさらしていれば寒さにやられて死ぬだろう。

粗末な避難所が設けられているのが見えたが、とてもではないが全ての罹災者を受け入れることはできない。

糧食の配給を待つ人の列ができているが、おそらく彼ら全員の胃袋が満たされる量が配られることはないだろう。

日が傾けば本格的に襲ってくる寒さにやられる人も多くなる。

「……持っていけるものは、持っていこう」

辰貴は残骸の中から拾える物を拾い、ともかく移動することを決めた。

由露葉も辰貴に習い白い顔と手を煤で汚し、倒壊した家屋の柱を起こしてゆく。

僅かに蓄えていた糧食の備蓄を持つため、床の下に土に埋めておいた瓶を掘り起こす。

——中には塩と米があった。

それだけで悟れるだけ、人の飢えた感性というのは鋭いものである。

飢えた目で見つめてくる人間の視線があった。

唾を飲む音が聞こえる錯覚を覚える。

——どこでも一緒だ。

由露葉と辰貴はそれらの視線を受けて思い出したくもないことを思い出してしまう。

その時、そうしたように彼らを威圧の目で睨み武器となる物を手

にする。

餓鬼に落ちた人と相對するため悪鬼とならねばならねば自らが朽ちる。

誇りや虚飾は腹を満たさず、人としての尊厳は元来持ち合わせるべき獣性の前には無意味であることをよく知っていた。

「ねえ、おじちゃん……おなか空いた」

年端もいかない子供が施しを望む瞳で見上げてくる。

昨日まで隣に住んでいた子供だ。

罹災し親とはぐれたか、あるいは。

由露葉は施しをしたくなる衝動をぐっと抑えて瓶を抱える。

「失せろ」

辰貴は押し殺した声でそう告げ、手にした廃材を振るう。

幼い子供を容赦なく打擲し、周囲への見せしめとする。

子供の悲鳴が耳を焼き、また、心が乾いてゆく。

辰貴が振るう暴力を諫めない自分もまた、彼と同じなのだ。

泣きながら慈悲を請う子供の視線を痛く思い、うつむく。

だが、そうして何かに申し訳なさそうにすることは酷く卑怯であることを覚え、由露葉は唇を噛むと冷酷の能面を被ることにした。

昨日まで親しげな顔で接してくれた隣人が恐怖と怨嗟の混じった嗚咽をあげて睨んでくる。

鼻を鳴らし、逃げるようにその場を去る。

俯いた顔に僅かに落ちる影は誰にも見られることはなかった。

生きて行くために彼らはいずれ徒党を組むだろう。

徒党を組まれれば、簡単に奪われる。

そのことも二人は良く知りすぎていた。

そして、最後にどのようなように振る舞うかも。

翌日、二人の姿が東龍宮佐瀬駐屯所にあった。

——ダダガルザの銀翼、再び空を飛ぶと知る人は喜んだ。

そして、英雄は再び英雄に祭り上げられることとなる。

がしかし、それはただ、地獄を経験した者が市井に落ち、食い詰めて、生きるために選んだ苦しい方法でしかなかったというのが真実だ。

大二次精霊戦争末期、龍元という国はアルメリア共郷国に北領本土の蹂躪を許し、その国土全てを爆撃可能圏に納められ、安全な場所などどこにもなかったのである。

——龍元を救い、歴史の闇に葬られた第二次精霊戦争末期の英霊、『竜誇飛竜部隊』はまだこの時、存在していなかった。

序幕 『東宮大空襲』（後書き）

書きかけの作品なので、不定期連載となります。

途中、用語の統一が見られないこともあるかもしれませんが、後で直します。

第一章 『北領守護隊』 1

第二次精霊戦争。

後の歴史家はこの戦争をそう称する。

軍事評論家はこの戦争を航空戦力の意義を明らかにし、戦争の在り方を変えた戦争と定義し、歴史家は人の精神が古い神霊から解放されたと解く。

そして、経済学者は経済活動の多くがより物質的な充足を求め始め、先進者は金銭的価値に重きを置き経済が停滞し逼迫することを解いた。

世界の歴史がゆるやかではあるが、大きな転機を迎えた。

一つの戦争が引き起こされるまでに様々な経過を経て、その過程で数多くの原因が生まれるように第二次精霊戦争が発するに至るまでも様々な理由がある。

それらは最終的に戦争が経済活動の一環であると言われるように経済の観点から見るのが一番、理解しやすい。

開戦に至る理由をそれらの理由を交えて国際上の立場の上から見っていくこととしよう。

確執は古く遡り、今は世界地図から名を消したユーファン帝国の打ち立てた大霊誓約がその発端となる。

一大勢力を誇ったユーファン帝国は近隣諸国を最も進んだ魔導技術と強力な軍事力を背景に植民地、または自国の領土としてゆく。

占領した土地の通商を押さえ、また、ゆくゆくはユーファンへと帰化させるために、そして国際的支持を受けんが為に大霊誓約を現界連合の場でユーファン主導で打ち立て各国に批准を求めた。

精界——この呼称は当時のユーファン帝国のもので霊界や玄界などその土地柄で呼称がことなるが、それぞれ同じものである——と現界に座するあまねく精霊を共敬し、人霊皆が潤恵を授得せん。

この趣旨と各国協調を建前とし、現界連合でのユーファン主導の

現界政治を執り行うべく大靈誓約への批准は着々と進められる。

それらの施策は様々な障害があったにせよ概ね滞りなくユーファン帝国の思惑通りに進んだ。

理由は大きく二つあり、一つ目はユーファンの強大な軍事力を背景とした恫喝、二つ目は現界各国に大靈誓約の建前に同調できる宗教的下地があったからだ。

多くの宗教が時の権勢を盤石とするための喧伝であり、一つの価値観を普及させるのに大きく貢献するものとして存在するものである以上、価値観を同じとする大靈誓約について当時の情勢はこれを受け入れる準備ができていた。

或いは、受け入れられるように作られていた。

そして、最も切実な話として各国が靈息魔術から精靈魔術を用いた魔導技術を普及させるべく時代が転化していた時期でもあった。

ユーファンは従属する国には惜しみなく技術供与をするとともにその支配を盤石なものとし、敵対する国には大靈誓約でもってして経済制裁を容赦なく加えた。

時の帝王ユーファン？世はその時代の趨勢を汲むことのできた時代の外交政治家でもあったのだ。

東に遠く離れた孤島である龍元はその国の興りが「龍靈、現降り八網を翼に掩いて宇と成さむ」と説く、靈獣である龍が人となりその国是を導くという宗教基盤を持っていたことからして、また、立ち後れた経済戦争に勝つ為、大靈誓約を拒むことなく受け入れた。

ここで龍元の歴史についても触れねばならないのだが、龍元は大靈誓約直前まで他国との関係を断ち、独自の文化と治世を敷いていた時期がある。

が、長く続いた平穏は制度自体に腐敗を加え、大きく世界の列強から立ち後れる形となる。

内部的腐敗と外敵に対しての危機感等の様々な要因が引き金となり、その国政を改める内乱を経て改革が起こった。

その後、龍元は勤勉な精神性を有したまま、ユーファンや他の列

強から貪欲に国家運営の全てを吸収し、力を蓄え始める。

地理的にユーファンから広く大茫洋を隔てており、地理的にもその支配が強くなかったことが幸いし、通商規制を受けることなく着々と国力を蓄えることができた。

その際、極東の周辺国からは独自の精神性を捨てた俗国と、列強から竜真似する魚と揶揄されたものであるが、時代の波に取り残された龍元にとってはユーファン等の列強から学ぶことが変遷してゆく国際情勢の中で生き残る術であった。

そして、起こったのが第一次精霊戦争である。

事の発端はユーファン帝国の植民地であったアルメリアが独立を表明したことであった。

全ての原因を列举するには暇が無いが発するに至る原因は二つある。

技術革新による供給過多と貨幣選良主義がデフレを生み、混乱した経済により国力を著しく落としたユーファン帝国が植民地に対し過大な関税をかけ、不平不満を蓄積したこと。

そして、アルメリアがユーファンの技術供与を受け精霊技術を展開させた練装技術の開発実用に至ったことが大きなものである。

ユーファンの現界での覇権を快く思わない強大国と同じようにユーファンからの独立を望む植民地の蜂起に瞬く間にユーファンの領土は減衰し始める。

はじめは、アルメリアの独立を認め、ユーファンがその覇権国としての地位を放棄することで決着がつくと思われた。

がしかし、アルメリアの練装霊獣部隊が強すぎた為に、ユーファンはアルメリアに取って変わられることとなる。

それだけではなく、アルメリアは周辺諸外国の領土も奪い、ユーファン以上の国土を有するようになりそのまま覇権国と成り代わってしまう。

その混乱に乗じて、もう一国、練装霊獣を軍備に実装した国があった。

東の小国、龍元である。

龍元は『龍霊』と呼ばれる特権階級による意志決定の遅さという政治的欠陥の為に機を失したものの、強大な軍事力を持つに至った軍部の独走により月州やテテ諸島等をその領土とした。

アルメリアが覇権国となったことで第一次精霊戦争は一応の終結となった。

こうして、世界情勢を大きく覆したアルメリアはその名を『アルメリア共郷国』とし、覇権国として現界連合を引っ張る形となった。ユーファンが大霊誓約を用いて各国を従属させた例に習い、戦勝処理を終えたアルメリアは新たに『霊長憲章』を打ち立てることとなる。

『あまねく精霊の呪縛から解き放たれ、人は真に精神の自由を得なければならぬ』

それは今まで尊いとされてきた精霊を隷属させる魔導技術の変革に伴った思考であり、宗教であった。

だが、それを拒む国もまたあった。

龍の霊たる竜霊をその支配階級に置き、その支配を盤石とする宗教の要にした龍元。

そして、アルメリアの覇権をよしとしない国々。

それら『精霊同盟』とアルメリアを中心とした『人現連合』。

龍元のダーザルゲツガ島空襲に端を発した第二次精霊戦争の火蓋は切って落とされた。

霊歴一八六三年の夏に端を発した第二次精霊戦争は一八六五年の冬を持ってしても終結を見なかった。

いや、終結の予想はあらかたついてはいた。

先制攻撃を仕掛けた龍元が大茫洋で優位に戦局を展開していた。それに大きく寄与したのが練装飛竜部隊による爆槍投下戦術である。

これまで大海獣による海上戦と、地上部隊による火力戦が戦闘の

趨勢を決していたものであるが、航空戦力という概念が加わったのである。

正確には第一次精霊戦争の時にも航空戦力というものは存在した。練装天馬部隊を使用した索敵、爆撃等の戦術は採られ、それが効果的であることは実証されていた。

だがしかし、それらはいくまで陸上部隊の進行を支援する範疇での運用であった。

その常識を覆したのがダーザルゲツガ島空襲であった。

練装した竜に搭載した魔槍でもってダーザルゲツガ島に集結した第一三アルメリア海竜団が全滅した結果をもつてして、アルメリアは戦略の基本方針を航空戦力に比重を置くことを決めた。

だがしかし、それだけの決定的打撃を与えていながら、龍元は第一次精霊戦争で力を持った陸軍と海軍がその有用性を認めながらも独立した権限を与えなかった。

熾烈を極めたダダガルザ諸島攻防戦において、ようやくその有効性と時代が戦術の転換を認識し、その開発、生産に龍元が着手したころにはアルメリアはすでに航空戦力を整え終わりつつあった。

あとは、物量に劣る龍元がアルメリアに押し切られるのにさほど時間はかからなかった。

そして、靈歴一八六五年九月一日、アルメリアは北の同盟国フロラツズィを牽制しつつ、龍元本土である北領に上陸した。

最早、この戦争は龍元、アルメリア、フロラツズィの三国が『どのような形で戦争を終結させるか』が問題であったのだ。

第一章 『北領守護隊』 2

『冬が来れば、敵は寒さに耐えきれず撤収する』

その撤収を待って果敢に反撃すれば勝てるというのが龍元政府――龍府の流した喧伝だった。

北領に向かう輸送飛龍『雲龍』の中でしきりにその喧伝を吹聴する新兵を振り返り、操縦席で辰貴はため息をつく。

まだ、成人はしていない少年すら兵士へと駆り立てて戦争をする国の未来が見えないほど、辰貴は盲目ではなかった。

彼らとて、そのことは薄々理解しているのだろう。

だが、安っぽい喧伝とわかっていながらもそれにすがるなければ恐怖に負けてしまいそうになる自分を鼓舞するにはそうとわかっていても唱えなければいけない。

――耐えられなく、なるまでは。

「そろそろ堅津海峡です」

計器を睨み精息を調息していた由露葉が辰貴に告げた。

「雲泳飛行に入ろうか」

北領は敵の航空勢力圏内である。

航空勢力圏内であるということは即ち、敵の海軍力が及ぶ地域であり運搬飛竜である雲竜の場合、為す術もなく誘精矢の餌食となる。少なくとも雲の上に出れば敵の哨戒蛇の索敵を躲せる可能性がある。

雲竜は雲の中を泳ぐように飛行する。

あまり、高く飛行しても敵の飛竜に発見される恐れもある。

雲の中を飛ぶのが一番、発見はされづらい。

また、雲には敵の索敵術式――精策を躲せる効果もある。

生物に備わる霊素に対し、精霊をぶつけて感触を手繰る策敵方法であり、第二次精霊戦争中に実用された索敵方法だ。

これにはいくつか欠陥があり、精霊が密集する場所――水霊の住

む水中や雲、火霊が顕現しているとされる火炎など——があれば精霊は通過できず索敵しづらいという難点も抱えている。

雲の中を飛行する、というのは同時に龍の場合、飛行するために必要な風精を継げないという難点も生じる。

飛竜の場合、飛翔するのに竜肺と呼ばれる竜体に下部に練装した肺に精息を込めて、火霊を発生させ肺気口から風霊とともにき出し推力を得て、翼に風霊を従わせて飛翔する。

水霊の濃い雲の中では火霊が起りづらく、また、風霊も少ない。そして、雲の中に入ると龍眼から送られる映像が白く染まる。時に、どちらの方向に飛翔しているのかわからなくなるのだ。

そのため、非常に不安定な飛行となり、長時間の飛行には適しては居ない。

だが、それを可能にするのが『竜霊手』の存在だ。

『竜霊』と呼ばれる高度に教練された精霊士が竜随に干渉し、精霊比を調整し困難な飛行を可能にする。

兵竜——飛竜、地竜、海竜の練装された竜の総称——は『竜士』と呼ばれる操縦士がおり、そして、選ばれた兵竜に『竜霊手』が座すこととなる。

『竜霊』とは『龍霊』——即ち、龍の霊を受け現界を執する霊とし人の身を持つ龍の化身であり、人の身である竜士より尊い存在であるからである。

人の戦は人の手で行うべきであるが、龍はその身魄を人に貸し与え、霊魂は人の横にあり、戦場を共にし血を流す、故に龍義に反すは人に非ず。

つまりは、『龍霊』が戦場に立たないことを非難されたくないが為、『龍霊』で家督を継ぐことのできない子息が人と共に戦うこととしたものである。

だが、竜霊が学ぶこととなる九頭竜学府でもって龍元最高の教育を受け、専門の式術——魔導の龍元での呼称——を学んだ竜霊はその式でもって高度な兵竜操作を可能とした。

銀嶺鱗・由露葉はその『竜霊』であり、浪代辰貴は由露葉に仕える『竜士』である。

ダーザルゲツガ空襲、そして、ダダガルザ諸島攻防戦で飛竜士として過ごしてきた二人にはそれでも難しい雲中飛行ではなかった。

「浪代竜士は陸竜隊の出身でありますか？」

年の若い兵士が貨室でのお喋りに飽きたのか操縦席の辰貴に声をかけてきた。

屈託の無い少年だった。

年の頃なら一八、九だろう。自分とさほど変わらない。

自分が飛竜兵となったのが一七歳であったことを考えると、長い時間を過ごしてきたようにも感じた。

「いや、海竜隊の出身だよ」

「では、ダダガルザ攻防戦には？」

「ああ、元々は第03海竜隊の『富岳』に居た」

「『富岳』では『紅閃』に？」

「いや、『黄炎』だった。『紅閃』に乗るはずだった由露……銀嶺鱗御竜の竜士が事故で亡くなられてな。『黄炎』の複座を急遽練習して運用していた」

『紅閃』、『黄炎』はともに龍元の主力飛竜である。

『紅閃』は竜霊手用の複座型、『黄炎』が単座の通常竜士用である。

辰貴はそのいづれも操縦経験があったが、『紅閃』についてはあえて黙っていた。

「私も今度、北領で『黄炎』を預かる予定になります。先達のご指導を頂ければ幸いです！」

少年兵は感極まったように声を高める。

辰貴は色々迷った挙げ句、当たり障りの無いことを答えた。

「アルメリアの飛竜は竜剣の射程内に入ると回転して剣先を外してから大きく左に旋回して避けようとする。回転し始めた時から心持ち剣先を左に向けておくといい」

漏らすまいと真摯に聞く瞳を向けられて、辰貴は自分がかつて持っていたものを見て苦笑した。

その様子を見ていた由露葉がほんの僅かに微笑んだのを見て、ばつの悪そうな顔をする。

「浪代竜士は北領でも飛竜に？」

「……目をやられてな。飛竜は無理だ。雲竜ならまだ乗れるが……戦闘は難しい」

辰貴は嘘をついた。

もう、戦場の空を飛びたくはない。

がしかし、それを今、国防の志に火を灯す若い兵士に告げる訳にもいかず用意していた嘘をつく。

若い彼らを死地に追いやり、自らは安全な後方任務につくことに罪悪感を僅かに感じたが、それは無理矢理胸の奥に押し込んだ。

——辰貴が死地に居た頃に、彼らは安全な場所に居たのだ。代わってもらっただけだ。

そう思いこむことにした。

苦々しい顔を見られたのだろうか。由露葉の表情が曇る。

「死して竜義に応じて、竜誇とせん。頑張ってくれい」

「はい！」

吐き気のする喧伝を口にした辰貴の顔を見ることなく少年兵は貨室へ戻る。

「自分は典藤勝磨と申します！北領でも機会があれば！」

名乗らんでもいいものを。

辰貴は胸中でばやきながら手を振った。

由露葉が横で沈痛な面持ちで俯いていた。

「由露葉……」

「違います……哨戒機がいます」

由露葉が竜随珠に当てた手を振るわせて呟いた。

「聞こえるのか？」

竜霊手は竜随珠を通じて竜の感覚を得ることができる。

雲泳飛行をする場合、視界を塞がれた竜の感性は耳だけになる。

「正面、機数二……距離四八〇〇……この肺音：『ワイバーン』です」

「巻き雲が見つかったらおしまいだな」

巻き雲とは雲泳飛行をする竜が残す雲の乱れである。

火霊と相克する水霊が火霊を追いかけて竜に追いつき、巻かれる雲の形状からそう呼ばれる。

僅かに逡巡する。

定石では下降し、雲の下を飛ぶことで巻き雲が起ることを避けてやり過ごす。

だが、航海戦力が居た場合、間違いなく発見される。可能性の問題だった。

本土と北領の間に広がる堅津海峡まで敵の海上戦力が展開している可能性は少ない。

「降りる」

辰貴は操竜桿を引き上げ、雲竜を降下させた。

静かに首を降ろし、降下していく雲竜の瞳が海上を捕らえる。

「……辰貴ッ！」

由露葉が悲鳴のように小さく叫ぶ。

貨室の新兵が何事かと操縦席を覗き込もうとする。

「何があつたんで——」

「発見された！近な物に掴まれッ！」

どしゅん、と大きく空気を震わせ海を割って燐光が迸る。

淡い緑の燐光を従えて飛来するのは精霊誘導式魔槍——精誘槍だ。大気を切り裂く甲高い音を立てながら緩やかな弧を描く精誘槍が光の粒子を散らしながら飛翔、上昇する。

辰貴は竜操桿を横に倒すと、足板を踏み込む。

急激に傾いた雲竜が横滑りするように急に高度を落とし加速する。翼の先端を精誘槍が決り、激しい炸裂音が響く。

砕け散った翼の練金装甲が飛び散り、雲竜が衝撃で横転する。

——いや、横転するように操獣したのだ。

「わああ——」

悲鳴の上がる雲竜の中で、翼が折れる衝撃を機体を何度も横転させて逃がす。

貨室の中が激しく物の打ち合う音で響き、肉の碎ける音がする。

由露葉が必死に竜肺の推力を調整し、均衡を保つ。

綺麗に横転を繰り返し、再び水平を保ち、辰貴は眼前の海を睨んで唸った。

「リヴァイアサル級……」

水面から僅かに背面の装甲を見せる練装水龍の姿が白い飛沫を上げていた。

全長200間はある巨大な潜水龍である。

鋭角的な練金外装は水霊の抵抗を受けやすいが鱗状に設けられた外殻が魚のヒレと同じ役割を果たし、結果、水中での取り回しを良くする。

背面に対空精霊誘導銃発射管6門、側面部に対衝撃殻を張り巡らし、六対一二本の竜脚にそれぞれ水精誘導三叉槍を備えている。

大注水口を兼ねる龍口部には4号級竜咆哮を備えるリヴァイサル級潜水竜は数多くの龍元海竜を屠ってきた。

「次撃、来ますっ！」

「『折る』ぞ！」

残り四本の精誘槍発射管が開き、緑の燐光が弾ける。

燐光を吹き上げ上昇する爆散槍が雲竜に迫る。

雲竜の後部から誤誘火光精が放出される。

火霊探知型の精霊誘導槍が誤精に引っ張られるように軌道を変える。

残った音精誘導式の精誘槍を雲竜は『翼』を根本から逸らして落下することで避けた。

雲竜が居た場所で交錯した精誘槍が緑の光から紅蓮の炎となって爆散し、激しく空を震わせる。

翼を折り、落下する形となった雲竜はためかせるように翼を広げ、肺気口を爆発させるように風火精をはき出し、風精揚氣を得る。

——『逸翼』と呼ばれる飛行方だ。

精誘槍を放ち切った水龍が海面から顔を覗かせ、口腔から空に向けて竜咆哮を放たれる。

安定しきる前に無理に機体を傾け、ぎしぎしと雲竜の練金装甲が軋む。

貨室で響く悲鳴を躊躇する暇も無く辰貴は竜操桿を手繰り、機体を安定させる。

リヴァイアサル級の攻撃を避けきった矢先だ。

——上空に抜けた精誘槍を見た飛竜が雲を抜けて現れる。

「ワイバーン、引き返して来ます！会敵ッ！」

「浪代竜士——！」

新兵が何かを訴えようとするが、それに構っている暇はなかった。——肉眼でワイバーンの竜影を捕らえる。

双発式竜肺と可変後退翼式の主翼と背面にある二枚の背角が特徴的な機体で、一对二本の竜足にそれぞれ三本ずつの精誘槍を抱えている。

竜角に火精竜剣、竜顎に二号竜咆哮を主兵装として持つ第二次精霊戦争末期に登場したアルメリアの主力戦闘飛竜だ。

自衛用の竜剣を二振りしか主翼に持たない雲竜では相手になるものではない。

「雲の中に逃げ込む」

猛禽が獲物を見つけたような獰猛さでワイバーンが雲竜に肉薄する。

竜角にしつらえられた竜剣が赤く光を放ち、震える。

放たれた火精弾頭が大気を切り裂き火線を作った。

雲竜の背中をいくつか貫き、火を噴き貨室で悲鳴があがる。

上下に交錯したワイバーンから逃げるように高度を取り、雲の中に飛び込む

追ってワイバーンが雲の中に入り、雲竜を追う。

――雲の中といえど、全くの無視界ではない。

肺気口からはき出される精炎の光や、減衰した精策波で索敵が可能なのだ。

ワイバーンがぐるぐると周囲を回り、雲竜を探す。

風精を継ぐ為に雲の上空に浮かび、そして、巻き雲を見定めてその進行予測先に降下する。

そして、竜剣の火弾をはき出しては雲竜を削る。

辰貴は雲の中で飛竜を横に滑らせ火弾を逸らし、由露葉は肺気口からはき出される精炎と精霊比を調整し、限りなく失速するギリギリの領域で機体を制御する。

「……小南田ッ！しつかりしろ小南田っ！」

貨室で混乱し悲鳴を上げる連中に気を持っていかれそうになる。

自分も喚くことができればどれほど楽かと思い、憎く思いながらも由露葉は辰貴を見た。

辰貴は静かな目で竜眼から見える敵の姿を監察していた。

――雲竜とワイバーンの違いは低速域での揚気安定性である。

運搬用飛竜の雲竜はその特性上、広く主翼を広げており、戦闘飛竜であるワイバーンは比較して小さい。

高速域はワイバーンに圧倒的な軍配があがるが、低速域では雲竜の方が安定する。

雲竜の最低速度を下回る速度で飛行すればワイバーンは揚気を失い失速する。

ワイバーンは攻撃に失敗すれば旋回し、再度、後ろや前から攻撃位置を取り直さなければならない。

――圧倒的に不利ではあるが、機会はそこにしかない。

辰貴は粘つく唾を飲み下すと、雲の上に出る。

「被補足！槍！」

「逸らす！」

頭を出した雲竜めがけワイバーンの精誘槍が放たれる。

瞬間、翼を畳んだ雲竜が雲の中に沈む。

——上空を通り抜けようとする、ワイバーンの腹が見えた。躊躇無く竜剣の引き金を引く。

放たれた火精が雲を破りワイバーンの片肺を貫き、破った。

零れ出る精光が黄緑の光を散らし、追って精炎が破れた穴から伸び上がり練装を焼く。

「下、もう一尾！」

気を配っていたツモリだった。

雲の下から攻撃しようとして上昇してきたワイバーンと交錯する。

ワイバーンの竜士——アルメリアでは竜騎兵と呼ばれる——も、

雲竜が翼を畳んでいるとは思わず、降下速度を誤り攻撃の機会を失する。

雲を抜けて翼を広げ、激しく精炎をはき出し均衡を取った雲竜はそのまま再び雲の中に飛び込む。

「え、あ！…真上っ！」

宙返りして再度攻撃しようとしたワイバーンと雲の中で再びまみえる。

竜咆哮が煌々と紅蓮の炎を含み、吐き出さんとされる。

「きゃあああっ！」

由露葉が悲鳴を上げ、目を瞑る。

貨室が兵達の悲鳴で埋め尽くされ、辰貴は恐怖の中で操竜桿を倒した。

——吐き出された竜咆哮が赤黒い炎となって雲龍に迫る。

その場で横転を始めた雲竜の腹を焼き、交錯しようとしたワイバーンの首を横殴りに、雲竜の翼がへし折った。

同時に雲竜の翼がひしゃげ、折れる。

上空に抜け、遅れて海面に突き刺さった竜咆哮が盛大な水柱を上げ、追いかけるように首を折られたワイバーンが墜落してもう一本、水柱を作った。

計器類が滅茶苦茶な動きをし、機体がばりばりと震える。

それでも操竜桿を手繰り、速桿を押し込み機体を安定させようとする。

「由露葉！精霊比！繰り返し逸らせる！」

——辰貴が叫ぶが、恐慌に陥った由露葉が正気を取り戻すことは難しかった。

気の遠くなりそうな時間だった。

何度も何度も翼を畳み、広げる。

——文字通り、羽ばたいて均衡を取ろうとしていたのだ。

「飛べっ！飛べ！くそっ！飛べったら飛べよっ！っгааあアッ！」
片翼が半ばから折れた状態では速度比を誤れば即座に均衡を崩す。

「怯えないで！竜がっ！この子がっ！」

由露葉が泣きながら叫ぶ。

竜肺口から吐き出される精炎を速桿で操り、竜鐙で偏向膜を休むことなく動かす。

そうして、不格好なまでに空を飛び続け、雲を抜けた先に見えた。

——龍元北領。

第二次精霊戦争でダダガルザに次ぐ、激戦地である。

第一章 『北領守護隊』 3

北領白寿駐屯基地。

北領南部に長く延びる檜間から塩鱗峠を越えた洞野を超えてさらに北上した山間部に位置する龍元の北領方面基地である。

北領警護に当たっていた旭日方面本部がアルメリア進駐部隊の空爆でその機能を停止してから白寿基地が暫定的な対北領防護の主要基地となっていた。

海からの偏向風が吹きすさぶ旭日と違い、白寿は山間に位置することから風の方向が一定し飛竜基地に適していたことからここに基地が設けられた。

その好条件が、辰貴らの乗る雲竜を助けたのもまた事実だった。

「着陸入るぞ！」

「大丈夫！落ち着いて、お願いだから！」

狂乱状態を引きずったまま、雲竜は蛇行しつつも助走路に向けて降下を開始していた。

焼けて半ばから折れた短い足を伸ばし、風精の揚気を現界まで小さく保ち、速度を落とす。

「浪代竜士！僕ら、助かるんですかつ！」

後ろで狂乱に陥ってる新兵どもを殴りつけたい衝動を抑えて、辰貴は雲竜を助走路に近づける。

「手近な物に掴まれっ！揺れるぞ！」

「三，二，一で行くから……大丈夫……いくよ？三，二，一……ッ！」

足が助走路につくと同時に、根本から激しく火が噴き上がる。

助走路に腹を擦り、摩擦で噴き上がる炎と衝撃が練金装甲をめりめりと引き剥がす。

あらわになった竜肉が焼けこげる臭いと血をまき散らし、助走路に赤く線を引く。

翼を地面に突き立て、さらに減速するが勢いは止まらない。
助走路から脇の草地に突っ込み、二転、三転、横転する。

そして、完全にひっくり返って、そこで、ようやく雲竜は停止した。

「……ごめんね……本当に、ごめんね……」

由露葉が竜随手に手を当て、しきりに謝っていた。

辰貴は横転した際に激しく打ち付けた額を抑え、大きく息を吐く。

——生きている。

安堵が緊張を解き、途端に全身の力がなくなる。

安全帯が食い込むままに体を預け、竜眼から走り寄ってくる作業
霊獣車を眺める。

そして、静かに目を閉じた。

傷ついた雲竜から運び出される物資と新兵、そして、戦場に立つ
ことなく死亡した遺体を眺め、辰貴は土の上に腰を降ろした。

由露葉は静かに胸の前で手を合わせ、雲竜に頭を垂れている。

「浪代竜士」

声をかけられ、振り向く。

先ほど、雲竜の中で声をかけてきた典藤勝磨だ。

「……小南田は僕の、同期でした。南原の時計屋の息子で、大人
しい奴でした」

雲竜を真っ直ぐに見つめ、瞳から涙を零している。

「竜義に応え死をもって竜誇とす……俺も英霊となって親御さん
を守るって言ってました」

震える唇を血が出るまで噛みしめていた。

——訓練学府では血を吐く訓練を共に受ける。同期とは共に血を
吐く仲間だ。

「こんな死に方って……あっていいんですか」

辰貴は吐き出した息に乗せて、呟く。

「あるんだ」

勝磨が膝を折り、土を掴む。

「うう……ああ……ぐう……あああっ！」

胴体から下を雲竜を貫いた竜剣で引きちぎられ、回転を繰り返す雲竜の中で打ち付けた頭が無惨にも潰れている。

そのほかに、竜剣の餌食ではなく雲竜の機動で殺された兵士達の死体も少なくは無い。

辰貴は立ち上がると基地に向けて歩きだした。

地面に蹲っている勝磨の肩を掴み上げて立ち上がらせると頬を張る。

「教えておく。どこであろうと一緒になんだ。死ぬ時は死ぬ」

与えられた宿舎で横になり辰貴は疲労を一気に感じた。

張り詰めた神経がはらはらと糸をほぐすように解けていく感覚が体中を蝕み、鉛のように体を重くする。

頭の奥が次第にすぎすぎと痛みだす。

個室を与えられたことに違和感を感じはしたが、その個室が今は心地良い。

余計な詮索に煩わされることなく倦怠の鎖に心地よく沈むことができる。

耳にこびりつく竜肺の音と飛翔音。

閉じた瞳の裏に広がる暗闇の中に精霊の放つ燐光と爆炎の残滓が灯る。

ちりちりと身を焦がす恐怖に体を縮め、意識の外へと追い出そうとする。

暑い暑い陽の光を思い出し、乾いた血の味を思い出す。

脚の裏を噛む蟻の顎、響く精霊音、獣の唸り、たかる蠅、そして吹き出る灰汁の入った鉄兜。

腹の底に広がる鈍痛が広がり、喉を焼くような痛みを覚える。

ハッシシがあれば落ち着けるのだろうか、それも今は無い。

あの心地よく鈍くなる感触が恋しい。

下着が汗で滲み、吐き出す息が荒くなる。

それでも寝てしまえば逃げられると必死に身を丸める。

疲れ切った体がさらに疲労を訴え、ようやく何も考えられなくなる。

後は心地良いか悪いかは別として眠れるだけだと安堵した。

そんな時に来訪者が来るから始末が悪い。

扉が控えめに叩かれ、苛立ちを覚えながらも返事をする。

「……はい」

「辰貴？」

おずおずと名を尋ねた声は由露葉のものだった。

由露葉は静かに扉を開けると何うように中を覗く。

辰貴の中で苛立ちが消えてゆく。

怯えた瞳を、少女がそれでも救いを求めるように自分を見ていたからだ。

彼女もまた、逃げることでできない幻影に怯えているのだ。

辰貴は身を起こし由露葉を見て、苦笑を作る。

由露葉は焦るように部屋に入ると駆け寄って寝台に腰かける。

その子供のような仕草に辰貴は微笑を浮かべる。

そして、由露葉の頭を撫でた。

撫でた手を愛おしそうに抱える由露葉はそっと辰貴に身を寄せた。

「竜宮にはいけないのか？」

「ここに居ては迷惑でしょうか？」

竜宮とは竜霊にあてがわれた特別な宿舎であり、竜士のそれよりかは良い作りである。

辰貴はわかっていて聞いたのだ。

「……また、飛ばなければならぬのでしょうか」

「だろうね」

辰貴は努めて軽く言ったツモリが自分でも少し驚くくらい声が重かった。

由露葉が吐き出した溜息がとても重かった。

その重さに押しつぶされるように寝台に二人で倒れ込む。

「……今度は生きて戻れるでしょうか？」

その言葉は今まで考えていなかった恐怖を思い出させる。

辰貴は明滅する雷精照明を見上げ、しばらく考え込んでいた。

何も応えない辰貴に不安を覚え、由露葉が身をよじらせ辰貴の顔を覗き込む。

布の擦れる音が聞こえ、雷精がちりちりと弾ける音だけが続く。

「生きるさ……」

弱々しく呟き、由露葉に背を向ける。

由露葉はそれでも安堵したように辰貴の背中に寄り添い腕を回す。這い上がり、女としての体を擦り辰貴の唇を求めた。

辰貴は一度だけ応え、その額に唇を触れさせると由露葉の震える体を胸の中に押し込めた。

「ン……ン……」

由露葉が辰貴の胸を啄み、甘く、熱を持った嬌声が響く。

ちりちりと頭の奥を焼く快感に、忘我の果てに眠るのも悪くは無いと思う。

辰貴はそっと、指先を這わせると由露葉の求めに応じた。

第一章 『北領守護隊』 4

帰るための雲竜を無くした辰貴らは二日ばかりしてから司令室に呼び出された。

井居武芒久中竜角から言い渡された辞任を聞き、辰貴はやはりという面持ちで応えた。

「……中翼士、でありますか」

その声に

「竜霊剣護の竜士だ。誰も文句は言わん」

竜霊剣護とは竜霊手付きの竜士のことを指す呼称だ。

——古くは竜霊を剣でもって守る護衛職をそう呼んだことが起源だ。

「経歴には目を通した。ダダガルザ攻防では武勲を上げている。療養除隊が無ければ三叉翼士になっていてもおかしくはないであろう」

翼士とは指揮官階級の呼称である。

龍元では兵卒を牙士と呼ぶ。

準に三牙士、二牙士、一牙士、爪士、爪長、そして小翼士、中翼士、大翼士と高い階級となり、さらに上の指揮階級として小竜角、中竜角、大竜角となる。

双牙士や三叉翼士などの特殊な階級も存在するがよっぽどの武勲を立てなければならぬ。

「編成する予定だった第四陸掩飛竜隊の小隊長として試作複座飛竜『銀戒』を下賜する。早期に部隊を練り実用に耐えるまでにしろ。以上だ」

辰貴は由露葉と共に格納庫で『銀戒』を受領する。

第二次精霊戦争末期、物資の乏しくなった龍元が『紅閃』の後継機として開発した廉価機である。

飛竜にしろ陸竜にしろ竜機は『竜骸』と呼ばれる竜の体に練装を施すことにより作られる。

魔導式でもって組成された練装を纏い、体組織を変化させ兵器に適した形へと変貌させ、練装した竜に人が乗る『竜座』と制動装置、そして計器の類を外装して人が操れる形となる。

ただ、練装を施す際には『全量保一』『対価交換』と呼ばれるように施す練装に必要な練装媒介が必要となる。

霊銀や陽鉦、魔石や神木などである。

それらを用いて、装甲を施し、肺を組み替え、そして兵装を持たせる。

魔導や式術を用いた魔具には共通して『精息』が必要となる。

四大精霊よりさらに原始的な霊媒で、大氣中に希薄なれど存在する精息は精界や玄海と呼ばれる現界の隣に横たわる世界から零れ出る精気のことである。

これらは多く、意識を持つ生物——植物すら含む——に多分に含まれ、死してなおその骸に止まる。

『生贄』という原始的な手法で持って集める方法も遙か昔には存在したが、現在ではもっぱら地下に埋もれた化石資源から採掘される。龍元がアルメリアに資源で劣るのは国土の狭さが災いして精息にしろ、練装媒介にしろ採掘量が乏しいからだ。

——戦争末期、物資に乏しくなった龍元が施した低物資複座飛竜が『銀戒』だ。

「……二号竜咆哮に……火精礫か。積載数が無くなれば戦えなくなるな。一号咆哮に換練して咆哮で継戦能力を高められるか？」

「できますね……三叉竜肺と前進可変翼は高速域、低速域での旋回機動性は高いですが安定性に欠けます。背角を三本……いえ、鴨鱗を練装します」

「制動が一気に難しくなるぞ。大丈夫か？」

「大丈夫……ですね。その分、積載武装量が低下しますが」

「竜脚が一对二本に尾脚で計三本。重くすれば戦えなくなる、か」

「竜剣は諦めましょう。作戦にあわせて脚に持たせるものは変えていきます」

辰貴と由露葉は許された範囲での練装計画を練る。

翼士飛竜は竜霊手の裁量で一定までの練装要請を受けられる。

『紅閃』ほど完成度の高い飛竜練装ならばともかく、『銀戒』は未だ実戦配備されてまだ間もなく、実戦では未だ飛翔した実績は無い。

前進翼という前に突き出した竜翼と後部に設けられた複翼、背面に二本立つ背角はギリギリまで機動性を重視した作りである。

翼の後退角を負数まで引き下げた作りは竜翼の付け根に負担をかけ、また、揚気を得難い為に不安定となる。

——後にアルメリアが少ない素材を工夫だけで高性能な飛竜を作り出した龍元を恐れ、航空霊獣開発を禁止する理由となった機体でもある。

飛竜同士の空戦ではその機動性が重要な要素となっており、敵の背後をいかに取れるかが重要となってくる。

前進翼は機動性こそ優れるが安定性と機体構造に難を抱える。

由露葉は竜首横に鴨鱗と呼ばれる上下に動く偏向膜の役割を果たす鱗を増設することでこの安定性を調整すると言った。

黄幕を被った銀戒の横に赤い飛竜が肺を震わせながら戻ってくる。竜脚を小刻みに震わせて格納を終えると竜首の上の竜鱗が跳ね上がり、竜座の中から竜士が現れる。

それに続くように赤い衣を纏った竜霊手が続き、竜士に手を引かれ紅閃を降りた。

優雅さすら感じさせる竜霊の所作を目の端に捕らえ、由露葉はもう一度、手の中の仕様書に目を通す。

「随分と、貧乏臭い竜ね」

赤い竜霊が由露葉をあざ笑うように言った。

それは銀戒を指した言葉か、由露葉のなりを指した言葉かわからなかった。

——政を代行する竜霊は通常、人より大切に扱われる。

龍元の制度的にその社会的地位を認められた竜霊はその支配階級に求められる所作と振る舞いがある。

だが、由露葉は竜霊としてはいささか粗末な衣服を着ていた。

「貴賤で戦争をしている訳ではないですから」

「お主か？雲竜でワイバーンを落とした竜霊は。この紅霊翼の暮羽以外にそのような勇心を持つ竜霊がいるとは思わなかった」

「……由露葉です」

「霊名を名乗れッ！竜角の誇りは無いのかっ！」

格納庫に竜霊——紅霊翼・暮羽の罵声が響き渡る。

竜角とは困難を突き崩す意を持ち、その誇りとは即ち竜霊の誇りのことである。

いじましように暮羽を見上げ、由露葉は呟く。

「誇りで生き残れるなら、そうします」

暮羽は端正で幾ばくかのあどけなさの残る顔を真っ赤にし、そして青くして吐き捨てる。

「……浅ましい竜」

遠くでそのやりとりをじっと見ていた紅閃の竜士はつと視線を上げて、辰貴を見る。

辰貴はその視線に気がつき、軽く会釈する。

この紅閃の竜士は天穿霧耶と言う。

——ダダガルザ攻防戦の後の大茫洋での後退戦から北領進駐まで戦い続けてきた白寿基地の名実ともに、エースである。

浪代辰貴と銀嶺鱗・由露葉の風聞は瞬く間に白寿基地の中に広がっていった。

雲竜で潜水竜の精誘槍を避け、ワイバーンを撃墜した飛竜士。

それが竜霊手付きで最も激しいダダガルザ攻防戦に従事していたとなり、中翼士で赴任したとなれば誰しもが期待と羨望、そして妬みの色眼鏡をかける。

だが、その日の晩には皆が一樣にその色眼鏡を外すことになった。
——食事の仕方がどちらも汚いのだ。

まるで飢えた獣のように食らいつき、皿まで舐める。
皿を綺麗に舐め終えたと思えば箸を舐め、指を舐める。
外された席に食べ残しがあればそれまで喰らう始末だ。

凄腕の竜士を見ようと集まった兵達はその所作も何も無い喰らい方に嫌悪を示し、一人二人と席を外す。

「……竜の皮を被った畜獣」

暮羽はそう吐き捨て席を外した。

白寿基地に残ったのは天穿霧耶と、第五師団第三陸竜中隊の丘嶋大洪翼士だけだった。

かつかつと箸で食器を叩く音と、辰貴と由露葉が芋を咀嚼する音だけが響く。

それらが終わり、箸を舐め終わるのを待つて丘嶋が呟いた。

「浪代、お前はダダガルザの生還兵だな？」

指を舐めようとしていた二人の動きが止まる。

ぎょろりと目を向けて丘嶋の姿を捕らえる。

四十過ぎと少し臺が立っていたが精悍な印象を与える。

だが、二人が気にしたのはその濁った光を持った目だ。

何も言わず互いに濁った瞳を交わし合う。

丘嶋は鼻を鳴らすと口元を歪めた。

「食べ方に気をつけた方がいい。皆が嫌う」

「……気をつけます。先任」

そう言つて辰貴は指を口に含めた。

苦笑する丘嶋は霧耶を見る。

霧耶は興味深く辰貴と由露葉の様子を眺めていた。

そして、ぽそぽそと呟くように喋る。

「……悔しくは無いのか？」

それは由露葉に向けられた言葉だった。

同じ竜霊に侮蔑されたことを言っているのだろう。

暮羽は確かに由露葉が知っている竜霊の中でも気性は激しいように思う。

「そんなもの、なんでしょうね」

由露葉は小さなため息に混ぜて呟く。

霧耶は苦笑した。

「強い訳だ」

「……獣畜と言われても、食べることができなくなってからでは遅い」

霧耶が眼光を鋭く細めた。

大洪が尋ねる。

「堅津海峡にリヴァイアサル級が居るのは本当のことなのか？」

「はい。哨戒機も飛んでいるということは、まず間違いなく補給線が分断されています」

「そんな中を飛んで来たのか。俺も皿を舐めておくべきだった」

大洪は真顔でそんなことを言った。

霧耶が尋ね返す。

「……本土の海軍は動いているのか？」

辰貴が応える。

「リヴァイサル級を沈められる龍元の潜水竜は『虞雷』のみだ。

『虞雷』は佐瀬の港で砲台代わりに係留されている。『回穿』を使つての突撃で破るにしても搬送する船が殆ど無い状態だ」

回穿とは小型潜水蛇のことだ。

——目標に回転しながら突撃し、装甲を穿ち、内部で爆発する。

戦争末期に登場した非人道的な特攻練獣だ。

「竜口の羽か……」

竜口の羽とは後が無いという意味だ。

「どのみち、兵站を絶たれれば大茫洋を押さえたアルメリアに北領を奪われるのは時間の問題だ」

「……どうして、そう言い切れる？」

「空きっ腹で戦えるか？」

辰貴に対して、霧耶は笑った。

旭日北領司令部が空爆でその指揮系統を喪失し、白寿基地がその代替となった。

その為、各地から遁走した敗残部隊が続々と集結していた。

辰貴らが合流したのはその最中であり、北領司令部は目下のところ反攻に出るための戦力を備蓄しているところであった。

その折りの補給線封鎖である。

だがしかし、それほど事態は深刻に受け止められておらず、部隊が集結するまでの間、束の間ではあるが辰貴と由露葉は落ち着ける時間があった。

格納庫に集めた自分の部隊員を前に、辰貴は慣れない訓辞を垂れることになる。

集まったのはいずれも若い兵士ばかりだった。

中には知った顔である典藤勝磨もある。

「第四陸掩飛竜隊の小隊長を勤めることになった浪代辰貴だ。以上」

単なる自己紹介に止まる自己紹介に由露葉は笑う。

若い竜士達はそれでも敬礼でもって返し、辰貴は背を向けた。

第一章 『北領守護隊』 5

白寿基地の大会議室では竜頭会幕が開かれていた。

龍元軍の作戦会議は特殊な形態を取る。

竜士らでもって基本概要の作戦を立案し、それを竜霊らが聴聞し、採択の場で再度論議する。

戦争に従事する現場指揮官による作戦立案を元に、九頭竜学府で学んだ竜霊が確認するという機構だが、その実は現場による専門家が立案しそれを竜霊により決定を下すという過程を経ることにより、竜霊の権威を高めることであった。

古くから続く制度で『竜意箴言』と呼ぶ。

——龍元が戦争に負けた遠因の一つでもある。

意思決定が遅く、柔軟な対応を取りづらい性質を持つ。

ことに、航空戦力に重きを置く戦局展開に柔軟な対応を見せたアルメリアに対し、龍元のそれは稚拙にも思えるほど遅かった。

加えて長きに渡り特権階級を維持した竜霊の『腐敗』により正しい判断ができずにあったのも悪制であった原因でもある。

だが、これは第二次精霊戦争という事案の側面で見えるからの悪制に見えるのであり、元来、深く学を修めた竜霊による確認機構を設けた『竜意箴言』はその本意としては悪制ではない。

『竜意箴言』は内政を司る龍府や司法の場にも存在し、多くの過ちを見過ごすことなく正してきた。

但し、真に問題を理解する竜霊が携わった場合のみという条件が付く。

「八網、月網・椰那多御竜、降座」

竜頭会幕に集う竜霊達が一同に上座に敬礼する。

まだ、年端も行かぬ少女が幕を割って現れ、上座の椅子に座る。

——八網一字の眷属である月網・椰那多。

龍元の竜霊にも階位が存在する。

大竜霊一字をその頂とし、それに天月光闇空海山幽をもって八網が続く。

その起源は始祖一字が八網一字を翼下とし、龍元の守護とならんと咆哮したことがその発端とされる。

由路葉の銀嶺燐などは、この八網から分家した竜霊であり、他の竜霊の多くが八網から分派したものか、あるいは九頭竜学府に登り人の身から『昇竜』したものだ。

「今時を解け」

椰那多は凜とした声で告げた。

井居武芒久中竜角は竜頭会幕に集まる竜霊に現状を説明する。

「現在、アルメリア進駐軍は楸勝山脈中腹に橋頭堡を設立、ここに駐留するサンダーリッツ騎士団を中心に防衛網を展開しております。これを直援するのは先立って制圧された釧十に駐留する銀盤竜騎士団となります。黒檀騎士団は『ベヘモス』四十匹を中心とした練装霊獣部隊で、これらが白寿と楸勝の間、島庭平野に広く展開して防衛網を作っております。銀盤竜騎士団はワイバーン二十尾から成る飛竜部隊であり、旭日方面本部を壊滅させた攻撃力のある部隊であります」

井居武は敵の航空戦力を攻撃力のある部隊と評価した。

旭日方面本部壊滅の実態は主力を黒檀騎士団に傾倒させた隙に、この銀盤竜騎士団が実施した爆撃によるものである。

指揮系統の混乱した主力は統率を無くし、進むにも退くにも困難な状況となり、辛うじて生き残った部隊で、かつ、落伍しなかった部隊のみが白寿に集うこととなった。

それだけの壊滅的な打撃を受けてなお、攻撃力を有すると表したのは連綿と続く龍元の航空戦力を戦力とみなさない慣習によるものだ。

その慣習の当然の結果として、現在の窮状を招いたものであるが、現在、この竜頭会幕に集まった竜霊にはその事実を理解できる者は数少なかった。

いや、既に理解はしている。

だが、それを認めることが困難なのだ。

軍本営にその旨を進言したところで、痛みを知らぬ本営は未だ陸海でもってその権勢争いを続けており、航空戦力の拡充と積極的運用に理解は及ばない。

幾度となく進言を退けられれば、人は目前にある責務に没頭することで、それらの現実から目を逸らすことを覚える。

今の白寿基地の竜霊会幕に集う竜霊の多くがその類だった。

——冬までの抵抗。

それが今の白寿基地を支える意思だった。

「これより楸勝橋頭堡駆逐作戦を解きたいと思います」

「解け」

椰那多は鷹揚に告げた。

年端もいかぬ少女を最高権者として頂くのにも理由がある。

アルメリアと龍元の戦力比は明かであり、砲火に晒される北領での戦線を維持するのには明かな象徴が必要であった。

それが月網・椰那多である。

大竜霊一字は八網の眷属から選出される。

最も一字に近い権勢を誇るのが天網であり、月網はその次点となる。

月網の竜霊であれば戦死したところで、竜霊の権勢にさほど揺るぎは無いものの、かといって軽んじられる立場でもない。

八網が先陣を切って北領を守護するに、竜誇を持って儀に応へよ。このような喧伝を用いねば戦線を維持できない程、龍元は疲弊しているのだ。

「陸軍戦力を島庭平野に展開、黒檀騎士団の防衛陣を固定し、楸勝山橋頭堡に対し飛竜隊による爆撃を実施、橋頭堡を無力化した後、中央からの突撃を実施し残敵の掃討戦に移行するのが大まかな作戦概要となっております」

井居武ら竜士が立案した作戦は旭日方面本部を奪われた際の手順

をそのまま真似た物であった。

「……敵に戦を学ぶか」

ぽつりと、誰かが零した。

誰もがそれを理解していたが、反論はしなかった。

それが現在、白寿に集結した北領守護隊の取れる最善手であることを理解しているからだ。

「御箴言下賜願う」

井居武は沈痛な面持ちに沈む竜霊達を一瞥し、採択を迫った。

竜霊会幕に集まった竜霊は思考を停止したまま決裁をしようとしたのだが。

「竜咆よろしいか？」

議席の末端から声があがった。

由路葉だ。

椰那多は自分と同じ年頃の娘が疑義を唱えたことに興味を持つ。

「霊命は？」

「銀嶺燐・由路葉、竜咆を発したくあります」

「許す」

許可を得た由路葉は竜咆——発言を始める。

「相対するに理を学ぶは欲すとしますが、其は其、此は此、また理も同じ」

下位竜霊が上位竜霊に対し意見を具申するときはその威を削がぬようにまずは相手に考えを促さねばならない。

「解け」

「……我軍の状況を鑑みるに、補給線を確保しているアルメリア進駐軍と北領守護隊では同じ理の元で動けば窮状を招く恐れがあります」

椰那多は眉を潜める。

象徴として北領に送られた椰那多には戦術、戦略に関する知識が無いからだ。

沈黙をさらなる催促と捉えた由路葉は言葉を継ぐ。

「まずもって、堅津海峡に展開する敵海軍を叩き、兵站を整えるべきが最善かと」

由路葉は補給線の確保を最優先とすべきと唱えたのだ。

——この時の北領守護隊の判断は次の通りだ。

無論、井居武以下、作戦立案に携わった竜士達も兵站の重要性は認識していた。

辰貴らによってもたらされた堅津海峡に展開するリヴァイサル級水竜の存在も認知しており、全くそこに視野が届かなかった訳ではない。

ただ、陸軍戦力を中核とした白寿基地の北領守護隊では対抗策が立てづらいこと。

そして、堅津海峡を確保したとして、本営が送る補給戦力の程度。それらを勘案した上で、さらに、楯勝山橋頭堡が旭日方面本部陥落をもつてして建設がはじまったことをふまえ、敵が戦力を整える前に電撃的に打撃を与えてしまおうという魂胆があった。

銀嶺燐・由路葉が心配しており、北領守護隊が配意していなかったのは楯勝橋頭堡奪還作戦の後の戦局である。

お互い無傷では済まない戦闘を行った後、釧十から戦力を補充できるアルメリア進駐軍と堅津海峡を抑えられ、補充のままならない北領守護隊では明らかにその後の展開で北領守護隊が苦戦を強いられるのは必至だった。

——さらに深く読み解くならば。

北領守護隊はそれで全滅してしまっても良いとすら考えていた。

北領全土をアルメリアに占領され、月網すら戦死すれば大本営とて停戦を考えるものという目算を井居武以下の指揮竜士は目論んでいた。

旭日方面本部を陥落された後も、敵橋頭堡を奪回し、奮闘するも全滅す。

それであれば北領守護隊としての面目も立ち、かつ、満足な補給を送ることのできない国体に継戦するだけの余力が無いことを明ら

かにでき停戦までの道を短縮できる。

由路葉の提案した補給線確保案は一兵卒劍護の竜霊が発した視野の狭い発言であるとするのがこの時は妥当ではあった。

「中竜角、策はありや？」

擲那多に問われ、井居武は返答に窮した。

「水竜を叩くには地竜や鬼では届きませぬ。飛竜を用いるべきかと」

「あいわかった。銀嶺燐、飛竜でもって堅津を奪え」

事実はその通りなのであるが、この後、これを発端に北領守護隊の飛竜隊は数奇な運命を辿ることになる。

第一章 『北領守護隊』 5（後書き）

書きためがあるうちは一日一話ペースであげていこうと思います。

第二章 『堅津海峡奪還作戦』 1

銀砂利。

それが由路葉についたあだ名だった。

後学として明らかになるが砂利とは龍元から遠く東、インディンのサーリという霊砂を指す言葉で、宗教的用語として『尊い霊媒』を指す言葉として龍元に入り、砂利という字をあてがわれたものである。

これが監獄用語で米類を指す用語として銀砂利と呼ばれるようになった経緯がある。

銀砂利・由路葉とは、食べ物に意地汚く固執する様を侮蔑するのにつけられたあだ名だ。

その発端は暮羽である。

「戦局を勘案するより、まず飯の心配とは。飯炊き竜らしい」

暮羽がそう侮蔑するのにも理由があった。

由路葉自体、何もなければ炊事場に赴き白飯を握る癖があったからだ。

暮羽としても面白くは無い。

中翼士として浪代辰貴が昇進したことにより、天穿霧擲がその同僚となる。

由路葉が作戦立案者として箴言したことにより、堅津海峡奪還作戦においては実質、指揮下に入るようなものだった。

ダダガルザ以降の空で勇名を馳せた飛竜が戦線復帰したばかりの竜霊の指揮に入るのでは格好がつかないのだ。

そのような感情を知ってか知らずか由路葉と辰貴は新造の部隊と一緒に天穿霧擲と暮羽を扱い、急遽実施することとなった堅津海峡奪還作戦を示達する。

「本作戦は堅津海峡に潜伏するリヴァイサル級水竜を駆逐し、本土との補給線を確保することにあります。堅津海峡に潜伏するリヴァ

アイサル級を北領守護隊が有する雲竜でもって誘い出し、後方にて待機する飛竜部隊で殲滅します」

格納庫の隅に設けられた粗末な会議室でもって作戦の概要を説明する。

「雲竜には誰が乗る？それに、誘い出せたとして敵は海の中だ。逃げられたらどうしようもない。それに、釧十から銀盤飛竜隊を呼ばれてこちらが全滅する可能性もある」

そう尋ねたのは天穿霧椰だった。

辰貴が応える。

「……雲竜には典藤を乗せる。まっすぐ飛ばすだけだから新兵でも飛ばせるはずだ。それに、試験的に運用したい兵装もあるから技術的に真っ白な竜士を載せて覚えさせたい。リヴァイサル級が浮上した後は、浮上地点を包囲するように鯨柵槍を投下し再度の潜行を阻止する。一時的な欺瞞措置だが、それで攻撃機会にしては十分な時間は稼げるはずだ」

鯨柵槍とは遠洋漁師が大型魚を捕獲する際に使用する槍のことだ。大型魚の周囲を周遊する漁船から放り、大きく円を描きながら潜行し大きな波の移動を水霊が感知しその発端へ進む槍である。

元来、狩猟用のものであり火力は無い。

がしかし、水中で音源を頼りに潜水する水竜にとってはこれが新型の水霊三叉槍と誤認してもおかしくはない。

事実、後世の水竜戦では鯨柵槍機動を元に水竜柵槍が用いられた。

「典藤の雲竜を先頭とし、リヴァイサル級を確認後、第四飛竜隊、第二飛竜隊その直援に天穿竜士の率いる北領第一飛竜隊が入って貰いたい」

「……美味しい飯だけを食い逃げするつもりか？」

暮羽が言うのは最大戦果を由路葉ら新造の飛竜隊が持っていくのかという意味だ。

「リヴァイサル級が攻撃を受けているとなれば釧十から銀盤飛竜隊の応援があってもおかしくありません、これらからの攻撃隊の護

衛を最も実戦経験の豊富な第一飛竜隊にて行って貰いたいという意味です」

攻撃部隊と対空部隊を分けるという思考は龍元には無い思考だった。

アルメリアは役割分担という意味で事実上、攻撃部隊、対空部隊という運用法を既に実施してはいるものの、戦術的に明確に分担しているものではなかった。

当然、戦場でその態様を見てきた暮羽にもその思考を理解するだけの経験はあった。

だが、暮羽は本当に由路葉がその事実を理解しているのかが判然とせず、また、個人的にも気に入らなかっただけなのだ。

辰貴は憮然とする暮羽と、俯いてその視線を躲す由路葉を交互に見ると会議を打ち切った。

「作戦決行は明朝〇三〇〇。各自、練装急げ」

アルメリア銀盤竜騎士団。

アルメリア軍の規模は騎士団で数えられる。

封建制が終了し、議会制を導入した政治体制の中にあって国防の要につく軍は解体されることなくそのままの位階でもって機能することとなったからだ。

旧来の世襲制と雇用制が折り合い、外部から見れば混沌とした様相の軍であったが、能力さえあればどこまでも重用されるアルメリア軍は優秀な軍隊ではあった。

その最たる例とも言えるのがアルメリア進駐軍銀盤竜騎士団で活躍した二人のエースの境遇である。

レンター・ブエインとランディ・オルフィード。

レンター・ブエインは上級騎士の産まれではあったが父であるハスラム・ブエインが先の精霊戦争で愚策を見せ、下級騎士に転落する。

唯一救われたのが父に先の戦争の形態を見る目があったことで、

父に勧められるまま飛竜隊に志願し、実力を持ってして飛竜隊小隊長を任されるに至る。

一方、変わってランディ・オルフィードは先の精霊戦争でアルメリアに滅ぼされたミリシアの敗兵で、本名をランドルフ・オアフィールドという。

ミリシア天馬騎士団にて『炎の騎士』という異名でもってアルメリア軍を震え上がらせた経歴を持つ。

身分を偽り、敵軍へ入隊することで追跡搜索を躲したがアルメリア軍の情報部も同人がランドルフ本人であることを半ば認めている。がしかし、レンター・ブエインの下に配備されて以降のめざましい活躍によりその位階をレンター・ブエインと並べ、上級騎士として爵位を賜っている。

アルメリア軍とは往往の戦勝軍が行うようにその功績に大きく報いることで士気を正しく高揚していた。

「しかしま、暖房くらい持ってきて欲しいモンだね」

レンターは滑路に足を付けるワイバーンを眺めながら目を細めた。龍をその制度の頂とする龍元と違い、アルメリアでの竜は卑しい霊獣として認識されていた。

上がる効果だけを正当に評価するアルメリア軍において評価こそ見直されてはいるものの、事実、陸軍の支援がなければ多面的な制圧活動は行えないことから未だ優遇されるには至らない。

哨戒活動を終えたワイバーンの竜殻が上がり、ランディ・オルフィードとその精霊手が降りて来る。

龍元では竜霊による竜霊手が当たり前のように存在するが、アルメリアでは単座で運用することが殆どで、ランディ・オルフィードのように精霊手を副座に載せるのは珍しい。

「よう！ティア！アサヒに敵さんは集まっていたかい！」

ランディの小隊は離散した敵の集合地点についての偵察を行っていたのだ。

「……アサヒは基地としての機能が失われており、残敵の集結は

ありませんでした」

ティア・アークリフ精霊手は淡々と事実を告げる。

「先日、報告のあったハクジュを仮の本部にしている可能性が強い」

ランディ・オルフィードはレンターとティアの間に入り、そう告げた。

ティア・アークリフはその容貌を人に見られることを極端に嫌う。白髪赤眼、色素の抜け落ちた真白の肌は人外の美しさを持っているがそれと同時に、本来的な産まれ方をした人間である出自を否定する。

第五世代魔導練装人間。

総じてクルステッドと呼ばれるホムンクルスで精息との相性が良く、霊媒無しでも大型火器を地上で扱え、訓練された兵士以上の働きをする。

精霊手としても優秀で、高度な火器管制や精息調整を行うことができる。

そのように、造られたからだ。

「例の変態機動をしたウンリュウか？」

「イツヨク……だったか。あれができるだけの竜騎士は今のヒノモトには数える程しかない」

ヒノモトとは龍元の別称だ。

古くは冒険家マルサ・ホロウの冒険記の中に出てくる『陽の光輝く元に黄金の島がある』という記述が語源となる。

世界的にはヒノモトが龍元の正しい呼び方になる。

「クリムゾンフレアはアサヒ基地攻撃の時に見ている。あとは他に誰が居る？」

「ブルースケイル、ホワイトトウスはグランドオーシャンで撃墜している。まさかとは思うが……話だけを聞くなりシルバーウィングかもしれない」

クリムゾンフレア、ブルースケイル等はアルメリア竜騎士団が敵

に付けた名称だ。

龍元の竜霊剣護の竜士は自分の竜の翼に竜霊の霊紋を描くことが半ば義務づけられている。

それらを見て、アルメリア竜騎士団は龍元のエースを判別する。逆に、アルメリア竜騎士団もまた銀盤等の他に個々人のマークを背負うことを良しとしていた。

「シルバーウィングはダダガルザで撃墜したはずだ。まさか、生きていますか？」

「わからない。がしかし、そんな気がする」
浪代辰貴を撃墜したのは他ならない、ランディ・オルフィード本人だった。

ダダガルザ島に精息を零しながら墜落していく黄炎を確認したが、その機動は明らかに中の竜騎士が生きている機動だった。

そして、最後に見た精息の光。

相次ぐ交戦で寄って確認する暇こそなかったが、ずっと気にしていたことではある。

「だとしたら、厄介だな」

「厄介？」

「……一度死んだ人間が地獄の釜を開けて戻ってくるんだ。そりゃあ、強いさ」

レンターはランディを見て意味ありげに笑った。

ランディは視線を逸らす。

そして、釧十湾沖に係留されている第3水竜群輸送竜『レーベン』から降ろされる巨大な槍を見て目を細める。

「……ガングニール？」

「知っているのか？」

そう尋ねるレンターの声はどこか楽しげだ。

「いや、教導書で読んだことがあるだけだ。大精力魔導槍で射程威力ともに強大だがその大きさが災いして守りづらく、発射に大量の精息を使うんだろう？」

「そうだ。ミリシア鎮圧戦の際に首都を砲撃した際に、敵の航空部隊によって破壊された経緯がある。だけど、今回はちよつと違うようだ」

「違う？」

「トドカツ橋頭堡に運ぶんだと」

ランディは思案する。

「……なるほど。溪谷を利用した天然の防護壁と精息を収集しやすい山岳部に設置してホクリョーをその射程内に収め、制圧するつもりか」

「冬が来る前に、終わるかね？」

「……どうだろうな」

第二章 『堅津海峡奪還作戦』 2

堅津海峡上空に典藤達磨の駆る雲竜が飛翔していた。

それは雲竜、と呼ぶにはいささか名状しがたい形状をしている。

元来、廃棄予定だった辰貴らが乗ってきた雲竜と別の廃棄予定だった黄炎の竜肺を無理矢理積載し、貨物室に魔導兵装を積載したもののだからだ。

竜翼の下に竜肺を二つ抱え、真下にさらにもう一本の竜肺を持つ。竜翼の付け根には練金装甲に覆われた長方形の機材が取り付けられ、背中に亀の甲羅のような円盤を持つ。

「典藤竜士、どうだ？」

「真っ直ぐ飛ばすのにも苦勞します」

どこか惘然とした声で典藤は返した。

同期の死を経験し、次は自らが囹とされ、寄せ集めの練装資材でもって造った雲竜に乗る。

飛竜竜士として一矢を報いたいと思っていた矢先のことである。

「典藤竜士の働き次第でこの作戦の成否が決まります。よろしく願います」

——銀砂利が。

新兵としての自分の力量を鑑みての抜擢であることは自ずと理解していた。

その抜擢が卑しい飯炊き竜霊により行われたことを思えば達磨も苛立ちを抑えることはできなかった。

がしかし、典藤達磨は飛竜戦闘の歴史を変える初の飛行をしていることをこのときはまだ知らない。

堅津海峡の上空に出た段階で、雲竜は竜首を傾ぎ雲に沈む。

降下に合わせ加速し、竜翼の端が大気中の水精を切り、雲を引く。達磨は間もなく雲海を抜け、眼下に広がる堅津海峡を捕らえた。

「雲竜、現在堅津海峡に到達しました」

その様子をはるか後方から見ていた辰貴は操猷桿を手繰り、僅かに息をついた。

「……大丈夫か？」

「雲竜の方は問題ありません。典藤竜士が恐慌に陥らない限り想定通りの成果を発揮してくれると思います」

「そうじゃなくてだな」

「……銀戒ですか？元々横滑りに対して不安定な機体なのに地上攻撃兵器を積載するのは確かに設計上厳しいですけど……」

辰貴は前座に座る由路葉の頭に手を置いた。

由路葉は一瞬だけ辰貴を見上げた。

——由路葉はこの作戦の為に相応の無理をした。

雲竜用の資材を調達し、練装式を構築した挙げ句そのまま眠らずにその練装を施した。

基地内の練装士の助力を得てはいるものの敗残し集まった北領守護隊に一体どれだけの人手があったものか。

由路葉は辰貴の手を取ると頬に当て、その温もりを確かめると瞳を閉じた。

「……共に、あります」

「……わかった」

リヴァイアサル級潜水竜『ディラガニール』は堅津海峡に補給線封鎖の為に潜水していた訳ではない。

アルメリア軍情報部が察知した龍元の潜水龍の航行計画の情報を受けて、同海峡において潜伏する龍元の潜水龍を追撃していたものであった。

龍元の同盟国であるジャルマが練装した潜水竜『ウィンディニー』を回収し、それを基礎として練装し直した水竜であることまでは掴んでいた。

『ユーゲン』と呼ばれるその潜水竜は突如としてその姿を水の中で消す。

察知できなくなる、という意味ではない。

完全に消えてなくなるのだ。

どういう魔導理論が働いている魔導具を積載しているかはわからない。

アルメリア軍情報部はこの『ユーゲン』が密命を帯びて大茫洋に向けて出向している情報を察知し、これの追撃を付近を航行していた『ディラガニール』に指示した。

『ディラガニール』は龍元に運び込まれる前の『ウィンディニー』の随伴艦『レーライル』との持久戦を終え、兵の疲労は一つの限界に達していた。

がしかし、戦争という命のやり取りを行う非日常においては時としてそのような要素は考慮されなくなる。

また、『ディラガニール』自身が『ウィンディニー』を追い続け、後一步のところで逃げられてきた現状もある。

潜水竜乗りとして『フゲン』や『コーライ』、ジャルマの『レーライル』を撃沈させてきた生粋の潜水竜乗りであるディラガニール水竜長ジョハン・バルクレツガはこの困難な任務を遂行することに誇りを賭けていた。

「蛇眼確、上空を敵の輸送機が飛行しております」

「蛇眼まわせ」

蛇眼とは潜水竜の首から伸びる水蛇で浅海潜行中に水面上を視認するための器具である。

ジョハン・バルクレツガは観測手が渡す蛇眼を覗き、レバーでもって望遠倍率を調整する。

「『ウンリュウ』か？」

「形状は似ております」

先日、逃げられた輸送竜と似てはいるものの、その姿は大きく変わっていた。

「『ゴーストドラゴン』の方はどうなっている？」

『ゴーストドラゴン』とは『ユーゲン』の俗称である。

神出鬼没で正体の無い幽霊竜とは良く言ったものだ。

「未だ反応ありません。がしかし、我々がここで動けば動きを見せるかもしれません」

「……秘密裏に交信を計った可能性は？」

「不可能です……動きがあれば竜耳が捕らえます」

『ユーゲン』の消失には未解明の部分が多い。

だがしかし、交戦を重ねるごとにその消失の特性として消失した地点からそう遠く離れた場所には現れることができないということを知っていた。

ジョハン・バルクレツガはここで二つの可能性を考えた。

一つはウンリュウをこのまま通過させ、目前の任務に従事すること。

そして、もう一つはウンリュウを撃破してしまうこと。

先日は持久戦を終えて竜肺が毒を放ちはじめていたことから水上航行による換気を行っている最中の遭遇戦であったが今回は違う。

「……あのウンリュウを落とす。おそらく付近にこちらを攻撃するための飛竜か水竜が居るはずだ。『ハリーケイン』を起動しながら浮上する。セントの銀盤竜騎士団に念のため打電しろ。『ユーゲン』が動く。槍に羽をつけろ」

ジョハン・バルクレツガ水竜長は交戦することを決定した。

ウンリュウに逃げられたことは、ディラガニールが堅津海峡で活動していることが敵に知られている可能性が強い。

秘密作戦従事中の『ユーゲン』を逃がす為に龍元が増援を差し向けたと見るべきと判断したのだ。

それを決定づけたのがこのときのウンリュウの形状だった。

それはジョハン・バルクレツガやディラガニールに乗竜している水竜士達の知る姿ではなかったからだ。

——公式の記録には残らないが、この戦闘は様々な勘違いの上にはじまった戦闘となる。

第二章 『堅津海峡奪還作戦』 3

海面が不自然な揺れ方をする。

そう、出撃前に聞いていなければ避けられたものではなかった。ただでさえ鈍重な雲竜に余計な装備をつけたそれは竜体を傾げて下から突き上げる槍を避けるのが精一杯だった。

海面を割って現れた、精霊槍が燐光を従えながら上昇する。

傾ぎ、横滑りする雲竜の翼の切っ先を掠め、雲割って上昇し、上空で旋回する。

「リヴァイアサル級確認！撃たれました！」

達磨は感応管に叫びながら、早鐘のように鳴る心臓を抑えるのに必死だった。

喉の奥がカラカラと乾き、腹の底が無くなってしまふような寒気を覚える。

生き残った現実を理性から切り離し、冷静になろうと努める。次に何をすべきか、初の実戦で忘れてしまう。

「落ち着け。焦らずに竜精珠を灯せ。お前の仕事は今はそれだけだ」

——今はそれだけ。

そう告げられた達磨は悔しさを覚えながらも、言われた通りにしていれば命だけは助かるという安堵に体中の力が抜ける。

届いた指先が竜精珠に精息を運び、竜精銖がほのかに輝いた。

グン、と雲竜が傾く。

雲竜の翼の根本にしつらえられた長方形の装甲が開き、上空に盾が展開された。

「——魔導障壁？」

本来、陸戦において激しい砲撃に対し前面に展開される魔導障壁である。

精息を激しく消費し、連続展開ができず、その間隙に絶え間なく

砲撃することにより結果として防御より攻撃を中心とした戦術の方が効果が高いとして廃れつつあるものではある。

だが、ジャルマ式陸戦戦術を基礎とする龍元には魔導障壁自体は廃れてきたものではあるが数多く存在した。

だがしかし、これを空戦で使ったのは典藤達磨の駆る雲竜が初めてである。

青白く輝く式術を虚空に広げ、魔導障壁が翻った精霊槍から雲竜を守った。

「攻撃隊、続け」

辰貴の号令により銀戒を先頭にした黄炎の編隊が真っ直ぐに海面に向かって降下していく。

そのいずれもが新兵で真っ直ぐとぼすのもやっとの連中だ。

「合わせてそれぞれ指示した方向に散開して槍を落とすだけでいい。いいな？いくぞ……三、二、一……散開」

鋭い旋回を見せる銀戒とは違い、続いた黄炎は鈍重に散開しそれぞれが足に抱えた槍を投下していく。

ディラガニールの中では落とされた槍の動きを見て騒然としていた。

「敵、精霊槍投下！」

「衝撃備えろ！欺瞞鱗散布！急速潜行！」

「敵、精霊槍、本竜の下で周回を開始！今までに無い軌道です！」
「ジョハン・バルクレツガはその報告を受け、すぐさま判断を下した。」

彼の直感的に戦場を捕らえ、素早い判断がこれまで多くの潜水竜を沈めてきた。

「潜行止め！『ハーリケイン』を起動させる！精霊槍バリスタ収め！」

上空では鯨柵槍を投下し終えた辰貴の第四飛竜隊に続き、第二飛竜隊が水面下に居るディラガニールへの爆撃体制に入っていた。

「……第二飛竜隊爆撃用意……三、二、一……」

「『ハリケイン』起動します！」

一瞬の出来事だった。

海がもの凄い勢いでへこんだのだ。

その直後、渦を巻いた海の中からデイラガニールの全貌があらわになり、とぐろを巻き竜鱗殻を大きく開いた。

開かれた竜鱗殻の隙間から大量の水と燐光が吐き出されそれが一つの竜巻となって爆撃体制に入った第二飛竜隊の眼前に展開される。

「散開！ 避け——」

そう感応で告げた第二飛竜隊の小隊長機が広がる竜巻に巻き込まれ上昇してゆく。

第二飛竜隊は一機のみがその竜巻から逃れたがバランスを失いあらぬ方向へ爆撃槍を落としていた。

——それでも上昇して墜落を免れたのは僥倖以外の何物でもない。勢いのついた竜巻は遠く距離を取る辰貴らの飛竜の操縦にも影響を与える。

「精霊槍、撃てエッ！」

竜巻を昇り、燐光を放つ精霊槍を打ち上げる。

竜巻の中を螺旋を描きながら飛翔し、精霊槍が第二飛竜隊の黄炎に突き刺さる。

翼に刺さった槍が赤く燦めいた次の瞬間、空に爆炎が広がる。

微塵に碎かれた竜骨と練装が炎精に飲まれた精息の尾を引き、青と赤の燐光を引きずりながら海に落ちてゆく。

「——各機！ 雲竜の上にて避ッ！ 二号竜珠起動！」

新兵で構成される第四飛竜隊は言われるままに雲竜の上空へたどたどしく逃げてゆく。

魔導障壁を下部に展開していた雲竜の背面の皿が開き、紫の燐光が放出された。

途端、精霊槍が竜を追うのを止め、そのまま直進をして上空で爆散する。

——夜精と呼ばれる精霊だ。

「第四飛竜隊は二番竜の雲竜を中心にここを離れて駒岳上空にて待機！」

——辰貴は即座に指示を出した。

出しながら由路葉が見る竜霊珠に映る竜影を見て舌打ちした。

「——第一飛竜隊、一番紅閃から銀戒。敵飛竜隊を確認。これより交戦に入る」

霧椰と暮羽の駆る紅閃が銀戒の後ろについた。

「了解した。第四飛竜隊を基地まで帰投させてくれ」

「浪代、銀嶺燐、まさか一竜で沈める気ではあるまいな？」

感応管の向こうに聞こえる声に由路葉が小さく吠えた。

「……生き続けるには如何に？」

鬱屈とした、それでも強い咆哮だった。

暮羽はただ、その強さだけは感じた。

「ハッ！ 然と聞いたッ！」

銀戒の背後から紅閃が赤い燐光を発して離れた。

紅閃はそのまま上空を精霊感のある方へと竜首を向ける。

銀戒が海面ギリギリまで降下し飛沫を上げながらディラガニールに飛翔する。

噴き上がる燐光と白波が混じり、きらびやかな帯となる。

「水竜長！ 飛竜一、低空から接近します！」

「精霊槍横射放て！ タイミング合わせ……一番、三番、五番！ 今！」

竜手に掴んだ槍が離れ、ディラガニールから放たれる。

精霊翼を閃かせた槍が緩やかな弧を描きながら銀戒に迫る。

その孤の内側にさらに加速するように銀戒は疾走する。

銀戒を捕らえ損ねた精霊槍は遠くで孤の続きを描き、半円を作り再度、背後から銀戒を追い始める。

「二番、四番！ 今！」

そして、遅れて放たれた二本の槍が正面から銀戒に迫る。

背後と正面から迫る精霊槍を見つめ、由路葉は竜座で大きく手を

広げ竜座側部の操竜桿を握る。

「やああっ！」

裂帛の気合いと同時に銀戒は一度だけ竜首を下に向けると海面を強く叩くように跳ね上がった。

海を、蹴った。

大きく跳躍した銀戒の下を精霊槍が通過しそれぞれが大きく銀戒を包み込むように上方向に緩やかに弧を描く。

その中心で、銀戒は竜肺を一拍だけ黙らせ、背後に倒れ込む。

精霊槍が燐光を引きながら檻を作る中で、銀戒は背面宙返りをしながら減速したのだ。

そして、竜首が正面を向くと同時に竜口が開いた。

「竜撃咆ッ！」

——白く細い火炎が銀戒の竜口から伸びる。

海面を割り、とぐろを巻くディラガニールの装甲に突き刺さり炎を上げる。

「被害状況知らせッ！」

「衝撃殻損傷！潜行に支障無しッ！」

銀戒はその驚異的な機動力を確保するために武装の積載量が少ない。

特に飛竜の主力兵器とも言える竜咆哮にすらまともな火力を持たせられない。

——ディラガニールにとってはそれが僥倖となった。

「姿勢このままッ！竜肺吸水！潜行二十ッ！」

「『ハーリケイン』の竜毒が竜肺室に充満しますッ！」

「このまま沈められるよりかは良いだろう。精霊槍装填ッ！あれを落とすぞッ！」

ジョハン・バルクレッガは対飛竜戦の経験を持つ数少ない潜水竜の水竜長であった。

その経験が告げていた。

——この飛竜は危険である。

その予感正しく、銀戒は今まで相対したどの飛竜よりも素早く旋回し、精霊槍を装填し終える前に再度の竜咆哮を放ってきた。

潜水を開始したディラガニールの装甲を海を貫き届いた竜咆哮の炎が刺す。

「第五区画竜肺損傷！」

悲痛な報告が聞こえるが、それでもまだ戦える範囲の損傷と判断する。

「我慢比べだ。これで飛竜も攻撃できまい。精霊槍を隔間で放ち続けろッ」

潜水しながらも上空に竜巻を出しているディラガニールに砲撃できる死角が無かった。

加え、精霊槍は多少の潜度なら放つことができる。

銀戒の積載する武装では潜水したディラガニールに致命傷を与えることができない。

ジョハン・バルクレッガは直感的に敵の不利と味方の利を勘案し、判断を下せる名将としての素養を多く持った人間であった。

彼の戦歴を見ればそれは明らかであり、後世の記録でもそう判断された。

だが、しかし――

「……昇るぞ。来れるか？」

「はいッ！何処なれどッ！」

ハーリケインの竜巻の風の中、竜首横の鴨鱗と主翼が下がり銀戒は大きく上昇する。

背後から放たれた精霊槍を右に左にと躲し、雲を割り、雲を引きずり上空へ飛び出た。

推力を失った精霊槍が爆発しその燐光の中を割って、銀戒は再び竜首を海へと向ける。

――眼前には大きく渦巻く雲があった。

遠く、敵飛竜隊と交戦していた紅閃の中、霧擲と暮羽は少なからず驚いた。

銀戒は躊躇うことなく、その竜巻の中心に飛び込んだのだ。

竜巻の中心は気流こそ安定しているものの、僅かにでも逸れれば途端に竜巻に巻き込まれる。

「飛竜ッ！ハーリケインの中心を下降していますっ！」

「精霊槍放てッ——竜首上げッ！竜咆哮用意ッ！」

竜巻の中を精霊槍が昇る。

銀戒は竜首に備え付けられた火精礫を立て続けに放つ。

熱せられた飛礫が勢いよく迸り精霊槍を貫いていく。

「「竜咆哮ッ！」」

「——やああっ！」

由路葉の咆哮と共に銀戒が竜咆哮の炎を放つ。

——ディラガニールの竜咆哮が発射されたのも同時だった。

交錯する竜咆哮の中で、銀戒は背面を焼かせながら螺旋を描き降下する。

ディラガニールの竜咆哮が雲を割り、銀戒の竜咆哮の海面に垂直に放たれた炎がとぐろを巻いたディラガニールに突き刺さり水柱を上げた。

「『ハーリケイン』停止ッ！急速潜行ッ！撤退する」
撤退を指示したジョハン・バルクレッガの判断は正しかったと言える。

海底を周遊している精霊槍——鯨柵槍であるが——による損傷を考えても、この飛竜を相手にはいけない。

現に、海面直前で急旋回して竜巻の勢いを利用しながら再上昇をしている。

——手に負える相手ではない。

勝てない相手に戦いを続ける程、愚かではなかった。

だが、ディラガニールにしてみればそれまで、本来最も警戒すべき敵を忘れていた。

「下方より竜咆哮反応ッ！」

「何っ！まさか——」

それ以降は発音にならなかった。

海底より発された螺旋状の燐光が潜行を開始したディラガニールの頭部を貫いていた。

そうなれば後は早いものだった。

竜肺に侵入する水を止める術も無く、潜水竜は肺に水を溜めるだけ溜めて沈んで行く。

当然、内部で操竜する百名近い水竜騎士達も一緒に沈むこととなる。

ジョハン・バルクレツガは激しく入り込む海水にはじき飛ばされながら自らが追いつけた幽霊竜を見ていた。

各部を支える練金装甲がその精息を絶やし、水圧に瓦解していく中を静かに一角の潜水竜が浮上してゆく。

一瞬だけ、その姿を辰貴と由路葉は見ることとなった。

「幽……玄？」

その暗く青い額の練金装甲の上に白く『幽玄』と描かれた潜水竜は、喘ぐようにその竜首を水上に出して空を見上げた。

それも一瞬のことで、僅かな換気を終えた後、それは再び海の底へと戻ってゆく。

通信も無く、去っていくその様子になんらかの作戦に従事中のものであると二人は察する。

——かくして、堅津海峡の底に沈んだディラガニールは公式の記録に残らない潜水竜によって沈められたものであるが、その功績は浪代辰貴が受けることとなった。

第二章 『堅津海峡奪還作戦』 4

数奇な海上戦闘が行われている上空で空戦史に残る戦闘が繰り広げられていた。

——空中支援竜という概念を持つ飛竜を運用した航空戦闘である。夜精と呼ばれる精息を拡散する雲竜の周辺広域に渡って、飛竜の持つ精索が鈍って居た。

夜精は精霊としては下位精霊となり影響力こそ弱いものの、他の精霊を隠す働きを持つ。

偽装用として用いられることは戦史上、存在してはいるものの空戦でこれを行った例はこの空戦が初めてである。

精霊槍は飛竜が纏う練金装甲から返る精索や、竜肺から放たれる火精や風精を搜し追いつがるものである。

夜精は敵、味方共に精索を妨げたが雲竜についてはそれとは別に雷精索を積載し、感応でもって味方飛竜にその精策感図を伝達していた。

——妨害、索敵を同時に行う管制機としての役割を果たしていたのである。

航空戦闘に於いては当時、広い空間を有し、機動力をもってして敵を叩くという思考が一般的であったが、そこに陸戦特有の集団戦の理論を持ち込んだものである。

「……面白い発想をしゃーがる」

レンター・ブエインは薄い緑色の練装を持つワイバーン『アトルシャン』の竜座で舌を巻いた。

不利な状況ではあるが、それでも戦場に立った上では可能な限り目的を遂行せねばならなかった。

「各騎散開。敵の攻撃機を重点的に叩き、潜水竜を守れ」

レンター・ブエインの背後についていた三頭のワイバーンが散開し、銀戒に向かおうとそれぞれが降下軌道を取る。

だが、その頭上から猛然と襲いかかる赤い飛竜が居た。

――紅閃だ。

「……暮羽。槍を放ったら即座に斬り込む」

「翔ぶがよい」

雲竜が雷精で捕らえるワイバーンめがけて精霊槍が放たれる。

紅閃は放たれた精霊槍を追い越し、ワイバーンに肉薄する。

精霊槍を避けようと回避行動を取ったワイバーンの腹に、紅閃の竜刀が閃く。

胴体を真つ二つに裂かれたワイバーンの残骸に精霊槍が刺さり、炎をまき散らす。

紅閃を無視できない敵と知ったワイバーンはそれぞれ放たれた精霊槍を避けながら背後に回ろうとする。

だが、紅閃はその間にも鋭く翻り、空太刀を閃かせる。

――風精を利用した竜剣の一種で、反り返った刀剣のような軌跡を描く。

主翼を断たれたワイバーンが制御を失い、錐もみしながら海へと落ちてゆく。

レンターのアトルシャンが空太刀を閃かせる瞬間に合わせて背後から竜剣を放つが紅閃はまるで木の葉が舞うように上昇、下降しその竜剣を避けた。

「気をつける。クリムゾンフレアだ」

紅閃の背翼に描かれた炎の羽の紋様を見て、レンターは残った味方に注意を促す。

「銀盤……翡翠竜か」

「相手に取って不足は無しッ！」

暮羽が威勢良く吠えると同時に、紅閃は加速しアトルシャンを引き離す。

一拍遅れて加速したアトルシャンは引き離された距離を不用意に開けることなく、旋回を始めると同時に竜剣が届く位置に付ける。

紅閃はさらに加速上昇し雲に飛び込み、アトルシャンがその後に

続いた。

レンターは即座にアトルシヤンを横に旋回させた。
雲を空太刀が切り裂く。

割れた雲の間から陽光が差し込み、眩しさに眼を焼かれるがその中に赤い飛竜を確実に認めていた。

痛む眼をそのままにレンターはアトルシヤンの主翼を広げ雲の下に出ると同時に再度、雲の中に飛び込む。

精策の届きづらい雲海の中では飛行を制限されるが、それでも不意を打たれるよりかは幾分マシだと考えたのだ。

数に劣る龍元の飛竜隊と、索敵の効かないアルメリア飛竜騎士団。状況の差違にレンターが気がついた時には既に、霧擲はその差違を把握しきっていた。

レンターがもう少し注意深く敵飛竜の動きに注意を払っていれば、素人を中心に編成された第四飛竜隊に気がつき練度の違いという優位性を見ることができたのだろうが、初手で判断を誤っていた。

霧擲は事前に第四飛竜隊の用意した雲竜がどういったものかについての説明を受けていたこと、攻撃隊の直掩としてどのような飛竜戦になるかをあらかじめ想定していた。

——つまりは、両者ともに機動力を生かした奇襲戦の形を取るのだ。

事実、霧擲は交戦と同時に攻撃機である銀戒を狙おうとするワイバーン二頭を撃墜するや無理をせずに一度引いた。

第一飛竜隊以外の味方飛竜が空戦戦力として期待出来ないことも知っていた。

だからこそ、自らをより優位な立場に置くためには敵飛竜の頭数を減らすしかないと考えたのだ。

「翡翠竜をやらぬのか？」

「後回しだ」

気性の荒い暮羽は攻撃的な竜精制御こそ卓越しているが、その舵を取っているのが天穿霧擲であるからこそ、これまで生き残ること

ができたのだ。

霧椰はアトルシヤンの動向を注意深く探りながらも、銀戒を狙い降下しようとするワイバーンを着実に仕留めていた。

「銀砂利、やりおるわ。負けてられぬぞ」

紅閃がワイバーンを仕留めると同時に、銀戒がディラガニールのハーリケインの竜巻を下り、舌を巻く。

レンターは紅閃が味方のワイバーンを手早く撃墜していく様を見つめ、また、追い詰められたディラガニールを認め、その矛先を雲竜に定めた。

雲の中を幾度も跳躍し、雲竜に迫る。

複数の黄炎が集う雲竜を認めると雲を飛び出し急上昇をする。

——そして、太陽を背に急降下。

陽光を背後にしての奇襲はアルメリア飛竜隊の定石だった。

アトルシヤンの竜咆哮が青白い炎となって雲竜に伸びる。

雷精策で正面から飛来してくるアトルシヤンを見つけていた典藤達磨は慌てる手で魔道障壁を起動させる。

雲竜の前で展開された魔導障壁がアトルシヤンの竜咆哮を受け止め青白い燐光を散らす。

「……なんだあありゃあ！」

確実に仕留められると思った雲竜が魔導障壁を展開するとは思ってはいなかった。

高速で傍らを通過していくアトルシヤンに雲竜は竜首を向けようとし、周囲に編隊を組んでいた黄炎が一斉に散開した。

その反応の遅さに、レンターはようやく素人であることに気がつく。

丁度、その時である。

海上で大きな燐光が立ち上り、水柱と共にいくつもの水泡が海面を叩き始めた。

——ディラガニールが撃沈した。

悠然と上昇してくる銀戒を認め、レンターはクリムゾンフレア以

外にも覚えておくべき敵が居ることを知った。

「……シルバーウィング」

銀色の翼に申し訳なさ程度に描かれた銀の鱗と翼は間違い無く、ランディ・オルフィードから伝え聞いたシルバーウィングと呼ばれる強敵のものと同じだった。

紅閃と銀戒がレンターのアトルシヤンを上と下から挟撃するように飛来する。

「救援は失敗した。撤収する」

撤収の指示は早かった。

追撃に走ってくる飛竜はクリムゾンフレアとシルバーウィング以外には居ない。

そう直感的に踏んで、レンターはほんの僅かの間のしんがりを努める決意をした。

紅閃が精霊槍を放ち、上空から銀戒が驚異的な旋回でもって正面に回り込む。

アトルシヤンが空に腹を向け、下方に降下しながら反転し、さらにもう一度反転する。

下方に逃げたアトルシヤンを紅閃が追い、今度は銀戒が竜咆哮でもってアトルシヤンを狙う。

レンターにしてみれば生きた心地はしていなかった。

雲に飛び込み、ほんの僅かに減速し、紅閃が加速し、雲下に抜けたのを確認するや上昇する。

雲を抜けた先に銀戒が現れ、火精礫を放つ。

急旋回するアトルシヤンの練金装甲を削ぐように掠め、銀戒と紅閃が空中で交差する。

交差した二頭はそれぞれが緩やかな弧を描き、包みこむようにアトルシヤンを包囲する。

高度から勢いをつけて強襲する紅閃の空太刀の切っ先を竜剣で弾き、反動でもって下方から放たれる銀戒の火精礫を避ける。

レンターは十分に味方が逃げ切ったことを確認すると、本格的な

逃げに入った。

雲海に飛び込み、さらに降下を始め、速度を得て逃げ始める。
紅閃の中で暮羽が吠える。

「逃げる気ぞ！」

「追う必要はないです」

由路葉は冷静にそう判断した。

名のある竜騎士を落とせば、それは敵の士気をくじくことにはなる。

がしかし――

「ランディ、遅いじゃないか」

「……やはり、か」

黒い天馬がアトルシャンの飛翔する先に現れていた。

飛竜より一回り小さく、流麗なラインを描く馬首、体躯の割に大きな翼が広がっていた。

下方に伸びた後脚翼と馬首にしつらえられた鬣翼が特徴的である。
天馬は飛竜ほど強靱では無いにしろ、航空霊獣の一つとして数えられる。

低速時の安定性と機動性は飛竜の追従を許さないが、最高速度や武装積載量において飛竜に大きく劣る為、本来は地上支援用の航空戦力として運用されていた。

だが、ランディ・オルフィードはこれを彼にしかできない方法でもって飛竜以上の航空霊獣として扱っていた。

主翼、鬣翼、後脚翼には彼の天馬特有の火精が渦巻いている。

アトルシャンがその傍らを通りすぎるのを確認するや、ランディ・オルフィードの天馬も馬首を翻す。

「シルバーウィング……生きていたのか」

ランディ・オルフィードは銀戒の軌跡に息吹を感じ、予感確信に変えた。

火精が激しく猛り、炎の翼となって天馬を激しく押し出す。

荒々しいまでの加速はあっという間にアトルシャンを追い越す。

その凶暴なまでの荒々しさにランディ・オルフィードはこう呼ばれていた。

「炎騎士」

「……です、ね」

由路葉は遠く翻る、赤い炎を見て鈍い恐怖を感じていた。

辰貴がそっと由路葉に触れるが、由路葉はいつまでも震えていた。

第3章 『榎勝橋頭堡攻略戦』 1

一つの事象というのはそれまでに至る、様々な事柄が複雑に絡み合い、引き起こされる。

堅津海峡奪回作戦は史実だけを見れば単純ではあるが、その実はいくつもの勘違いが織りなした希有な作戦であった。

いくつか補足しなければならないことも、ある。

銀嶺燐・由路葉が何故、雲竜を支援機として運用する発想に至ったか。

また、鯨柵槍の発想と調達をどのようにして行ったのか等である。まず、雲竜については由路葉と辰貴が最前線に立つことなく生き残ろうとするための最終案であった。

輸送飛竜士としてではなく前線飛竜士として運用される場合、傷病を理由に後方支援を申し向け、最前線に立たない為に使用するつもりであった。

本来、典藤達磨が一人で運用した雲竜は竜霊手を前提として練装されている。

しかし、その発想を得るまでには実に様々な経験や知識がからんでくる。

それらはひとえに彼らの今まで得てきた経験や知識の中から発されたものであり、それらの出所を知るには彼らの経緯を見てみるのが早い。

銀嶺燐・由路葉は銀嶺燐の家の次女として産まれる。

家督を継げる長女、長男と違い、次女、次男となる竜霊はその身と家禄を立てるために小等、中等、高等学府で学び、最高学府である九頭竜学府へ学を進めなければならない。

紅州大学府、広芝大学府、鏡都大学府、盟子大学府、東宮大学府、呉ヶ大学府、樺芒大学府、藤海大学府、北領大学府。

この九つを持って九頭竜学府と称される。

由路葉はそのうち最も難しいとされる東宮大学府の出である。

第一次精霊戦争中の戦争気風が蔓延するなかで学を修める中、家督を継ぐ姉と違い身を立てる為には当時、四つの道があった。

——外交官、軍人、研究者。若しくは家督を継ぐ竜霊との婚姻。

由路葉は当初、研究者——即ち、式者としての道を歩もうと決めていた。

がしかし、当時の東宮大学府の術式研究会に由路葉の入る空きは無く、結局、最短での研究者の道を進むには軍人——霊獣開発式者の道を実地で行う以外になかったのである。

九頭竜学府の教師の薦めもあって、由路葉は軍開発者への道を進む。

この時の由路葉の年齢は一四である。

竜霊は六つの時から竜学舎と呼ばれる学府で庶子とは異なる教育を受け、十二になるころには九頭竜学府を選ばせられる。

元来、竜霊は九頭竜学府にて学を修める時期の方が長く、政界に携わる竜霊は概ね九頭竜学府で八年以上の歳月を重ね、『成霊』する。

北領守護隊当時の年齢が一七であり、その当時の暮羽の年齢が一八であることを鑑みれば竜霊としては若いものの、従軍する竜霊としてはそう珍しいものではない。

由路葉はその後、海軍所属の肩書きで龍元最大の呉ヶ鎮丘で海竜戦術と開発に携わることになる。

潜水竜を交えた海竜戦においての機動水竜の運用に携わった際に、机上の空論で終わったのが水竜の密集戦闘である。

魔導障壁を用いた密集隊形にて敵の機動部隊、本隊を釘付けにし、夜精を用いた潜水竜でもって敵本隊を叩く。

魔導障壁自体が水精との相性が悪く、海上で展開した場合、波に流されやすい性質があるため、魚龍三叉槍を放たれた場合、防御ができないという実験結果により廃案となった。

——堅津海峡での雲竜運用にはこの発想が元となっている。

由路葉自身がこの実験において大型魔導障壁と潜水竜用の夜精甲の開発に従事していたことから潜水竜より小型の雲竜用のものを既存の兵器を調整して作り上げるにはそう、難しくはなかった。

——現実の作業量が問題ではあったが。

銀嶺燐・由路葉はこの後、第二次精霊戦争に向けて由路葉は紆余曲折を経て第三海竜隊頭竜『富岳』に乗り海上飛竜隊付きの竜霊手となる。

この頃に、浪代辰貴と会うことになる。

一方、浪代辰貴は庶子の出となる。

東宮の産まれではあるが、典獄——犯罪者を収監する監獄の長——であった父の仕事の為、幼いうちに北領へと移る。

余談ではあるが龍元の歌人として後に名高い埜乃泉とは幼少期の類友で小等、高等と共に学ぶ。

埜乃泉が手記に『竜活が如し喧しさ』と記すように闊達な幼少期を過ごす。

典獄である父は当時の官吏が厳しくあるように辰貴にも厳しく当たり、これが辰貴にとって早期に家を出るきっかけとなる。

また、北領の典獄では辰貴にそれ以上の教育を受けさせる学費を捻出することができないこともあり、辰貴は自ずと陸軍に入ることを選ぶ。

当時の軍志願者の多くが戦争で手柄を立てて竜義に応え竜誇とせん。という喧伝に血を沸かせた若者の集まりであるのと辰貴の場合もそう変わらなかった。

逼塞し始めた将来に見切りをつけて、新しい何かをみつけようとする若者に軍はとかく魅力的ではあったのも事実だ。

入隊した辰貴は上意下達を徹底する陸軍に於いて、辰貴は漁師上がりの良い先輩と訓練部隊を共にする。

遊びの中で捕鯨の仕方について教わり、それが後に知る精霊槍と基本的な術式が似ていることを覚えた。

——何のことは無い知識が後に戦況を変えるときは思い

もしていない。

簡約ではあるが、その後の浪代辰貴の経緯について記しておく。

辰貴は陸軍での基礎訓練課程を終えて専門課程を修める際、霊獣士を選択することとなる。

その際、最も適性を見せたのが飛竜士としての適性だった。

飛竜士になるには目の良さの他に、平衡感覚と風精調息、飛竜を構成する複雑な練金装甲術式と、風精式学を修めなければならなかった。

元来が『竜活が如し』と呼ばれるくらい闊達であった辰貴は飛竜という軍の中で比較的、新しい分野に興味を持ち、これを覚えてゆく。

当時の辰貴の感覚で言えば新しい玩具での遊び方を覚えるような感覚で飛竜に触れていたのだ。

軍属ではあったものの、戦争気風が吹いていたとはいえ戦場に立ったことのない若者にとって霊獣とはそのような物である。

空、という元来、人が到達したことのない境地に行く飛竜に感動と自由に飛び回る様に自分との相性を見いだし、専門課程で優秀な成績を残す。

ここから幾ばくか、数奇な道を歩む。

辰貴が飛竜課程を修了した直後に大本営に於いて、ダーザルゲツが空襲の計画が立っていた。

——大海竜富岳に積載した飛竜隊でもって空襲を行うと同時に宣戦布告する。

だが、当時、海竜から発進する飛竜という実例が無く、試験飛行中に海軍飛竜隊に着陸事故で欠員ができたのである。

そこにあてがわれたのが専門課程を終えたばかりの辰貴だった。

海軍は経験豊富な飛竜士を要請したが、陸軍はそれに対し比較的成绩優秀な新兵を送ることとした。

——経験豊富な陸軍飛竜士がもし、同様の事故を起こせば陸軍の沽券に関わる。

新兵ならば事故を起こしたとしても弁が立つという理由である。

海軍はこれに憤りを示したが、着任時、辰貴はこの海竜に自らが乗る黄炎でとんでもない着竜をしてこの確執を有耶無耶にした。

海竜の背甲は陸上の助走路と同じ間隔が取られている。

がしかし、着任時、呉ヶ鎮丘に係留されていた富岳にはダーザルゲツガ空襲計画の為の航行用物資が広げられている最中で、初めて富岳を見る辰貴には背甲が助走路とはわからなかった。

辰貴としては海軍の飛竜が事故を起こす程難しいものであると聞いていたことから、狭い背甲に飛び乗るものだと思い、富岳の竜首から伸びる係留策に竜尾を引っかけて垂直に着竜したのである。

これに富岳の飛竜隊長神貫平地が驚嘆し、陸軍に『一度くれた竜士を後から返せと言われても返さん』と啖呵を切り、自分の部下となった浪代辰貴を可愛がったのである。

この神貫平地が本来、銀嶺燐・由路葉の竜霊剣護の竜士となるはずであった。

だが、それ以降も数奇な経緯を辿り、由路葉は辰貴を竜霊剣護とし開戦に至ることになる。

熾烈を極めたダダガルザ島決戦の後、療養除隊し再度、戦線に復帰したというのがこれまでの経緯と言える。

そして、堅津海峡奪還作戦を経て、浪代辰貴と銀嶺燐・由路葉を巡る数奇な運命はここで一つの転機を迎える。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1941ba/>

君、竜の咆哮を聞け。

2012年1月13日21時00分発行